41689
教科書文庫
4
810
41-1933
200630
1604

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

八洲文藝

375.9
Da19
資料室

資料室
375.7
S219

昭和八年十二月二十七日
文部省檢定濟

文學博士 佐佐木信綱
文學博士 武田祐吉 編

最新國文讀本

湯川弘文社

雪草春田菱　　蕪　菁

廣島大学
教養
33928

最新國文讀本　卷八

目次

一　文字と文章　一
二　流泉啄木　〔今昔物語〕　一〇
三　重盛の諫言　〔平家物語〕　一五
四　平家の末路　高山樗牛　二五
一　清盛　二五
二　都落　二九

五　落花の雪　〔太平記〕　三二
六　季節の興趣　〔徒然草〕　三八
一　折ふしの移りかはり　三八
二　花はさかりに　四一
七　百蟲譜　〔鶉衣〕　四五
八　奥の細道抄　〔奥の細道〕　五〇
九　天明調　六三
一〇　雀の生活　北原白秋　六七
一一　雅文三題　〔泊洒舎文集〕〔櫻園文集〕　七五
一二　玉かつま抄　〔玉かつま〕　八〇

一三　秋の讃美　中村孝也　八四
一四　十訓抄　〔十訓抄〕　八九
一五　人生の熱愛者　安倍能成　九三
一六　銀の猫　〔藤簍冊子〕　一〇〇
一七　歌人西行　藤岡作太郎　一〇八
一八　去年のしをり　〔新古今集金槐集山家集〕　一一七
一九　日野山の閑居　〔方丈記〕　一二〇
二〇　江戸幕府の瓦解　井野邊茂雄　一二八
二一　世界の四聖　高山樗牛　一三四

〔自修文〕
一　庭燎に奉仕して　幸田露伴　一四九
二　長谷寺　〔古今著聞集〕　一五九
三　賴光と鬼童丸　森鷗外　一六三
四　高瀨舟　一四七
附錄
宮殿・裝束・乘輿圖

帝國圖書館藏

最新國文讀本　卷八

一　文字と文章

日本の古代には文字は無かつた。支那民族の製作使用した漢字が、輸入されてから、日本でもこれを使用して文章を書くやうになつたのである。それだから日本に於て書かれたる最初の文章は漢文であつた。

然るに漢字は、もと〳〵支那人の作つたものであるので、漢語を寫すには適してもゐようが、これと組織性質を異にする國語を寫すには、その儘では不便である。そこで日本ではこの漢字及び漢文に對して、種々の改良が加へられたのである。

一體漢字にはその本國に於ては、字毎に一定の讀み方がある。これを字音といふ。また字毎に一定の意味がある。例へば一といふ字は、たゞ一箇の數を表すし、松といふ字は、松杉科の植物の一を表すといふやうに、それ〴〵固定した意味がある。それが支那に於ける用法どほりに使つてゐたゞけでは、不便であるので、種々の手段が案出されたのである。

第一には、支那に於て用ふる以外の意味に漢字を使用することが行はれた。椿・屆・沖・縞・苳等はこれである。

第二には、日本でも新しく漢字に模して文字が製作せられた。峠・辻・榊・籾・俥等はこれである。これを國字といふ。

第三には、固有の內容には拘らずに、たゞある音を發するだけに漢字を用ふる法が發達した。これに一字一音を表す場合、一字多音を表す場合、多字一音を表す場合等があつて、盛んに使用せられ

國字

萬葉假字

た。この方法で使用せられる漢字を萬葉假字といふ。

この字音で表す方法は、支那本國にあつても、例へば外國の地名人名等を表す場合には行はれてゐたのであるが、それが特に日本に於て發達したのである。

かやうに個々の文字に就いて特殊な用法を生じたと共に、これを排列して文章とする方法にも、漢文の法則に依らない、國風の排列を生じた。例へば

老夫與老女二人在而、童女置中而泣。（古事記）

の如き、その例である。又漢文では現しにくい國語を、かの萬葉假字で現した文章は、例へば

次國稚如浮脂而、久羅下那洲多陀用幣琉之時、如葦牙因萌騰之物而、成神名宇麻志阿斯訶備比古遲神。（古事記）

次に國稚く浮脂の如くにして海月成す漂へる時に、葦芽

の如萌え騰る物に因りて成りませる神のみ名は、宇麻志阿斯訶備比古遲の神。

の如きである。全體を萬葉假字で書いた歌や文章もある。

和何則能爾宇米能波奈知流比佐可多能阿米欲里由吉能那何列久流加母。（萬葉集）

我が園にうめの花散るひさかたの天より雪の流れ來るかも。

我が園に云々　大伴旅人の作。

又動詞形容詞の語尾や助辭などの如く、殊に漢文で現し難い部分だけを萬葉假字で表し、その部分を小字に書いて他と區別する書き方もあつて、これを宣命書といひ、祝詞・宣命などは、この法に依つてゐる。

宣命書

如此仕奉爾依氐、今母去前母、天皇我朝廷乎平久安久足御世乃茂御世爾齋奉利、常磐爾堅磐爾福閇奉利、預而仕奉流處處家家王等卿等母、平久天皇我朝廷爾伊加志夜久波叡能如久仕奉利佐加叡志米賜登、稱辭竟奉良登白。（春日祭祝詞）

かく仕へ奉るに依りて、今も行く先も、天皇が朝廷を平らけく安らけく足し御代の茂し御代に齋ひ奉り、常磐に堅磐に福へ奉り、預りて仕へ奉る處々家々の王等卿等をも、平らけく天皇が朝廷にいかし八桑枝の如く仕へ奉り榮えしめ賜へと稱辭竟へ奉らくと奏す。

上代に在つては、かやうに漢字のみを使用して文章を書いてゐたものである。しかし漢字は字畫が多くて書くのに不便なのでこれを略して略體假字を生ずるに至つた。それに二つの方法があつて、漢字全體を草書に書き和げるものと、漢字の偏傍を取つて他を省略するものとである。平安朝時代に入つて、この二つの方法が發達して、前者は平假字となり、後者は片假字となつたのであ

略體假字

る。

この平假字は、文章全體を萬葉假字で書く方から發達して、主として宮廷の人々の間に用ひられた。平安朝時代に於ける歌や物語・日記等は主としてこれに依つて書かれてゐる。往々漢字を交へるが、それはあまり多くは無い。

八日、なほ河のぼりになづみてとりかひのみまきといふほとりにとまる。こよひふなぎみれいのやまひおこりていたくなやむ。あるひとあざらかなるものもてきたり。よねして返りごとす。をとこどもひそかにいふなり。いひぼしてもつるとや、かうやうのこと所々にあり。（土佐日記）

一方片假字は、主に僧徒の間に發達し、これは宣命書の文の系統を受けて、漢字を主とし片假字を細書して文章を綴つて行く。

今ハ昔、源博雅朝臣ト云フ人有ケリ。延喜ノ御子ノ兵部卿ノ親王ト申ス人ノ子也。萬ノ事止事无カリケル中ニモ管絃ノ道ニナム極タリケル。琵琶ヲモ微妙ニ彈ケリ。笛ヲモ艶ズ吹ケリ。（今昔物語集）

又かやうな假字文の外に、男子の間には純粹の漢文も製作せられたが、日本風に崩れた漢文も日記・記錄などに盛んに用ひられて一種の文體を成すに至つた。

九月一日、庚戌、武衛、可レ有レ渡ニ御于上總介廣常ノ許ニ之由、被ニ仰合セ一。北條殿以下各申ニ可レ然キ之由ヲ一。（吾妻鏡）

九月一日、庚戌、武衛、上總介廣常の許に渡御あるべきの由仰せ合せらる。北條殿以下各〻然るべきの由を申す。

中にも書簡文にあつては自卑の語なる候が發達し、且つ一種特別の慣用句などを生じていはゆる候文を作るに至つた。

先日は御書面辱拜見仕候。寒氣の節彌御雄勝に御座被レ遊、大慶に奉レ存候。野僧無事に罷過候。わすれ候錢竝に托鉢

の米落手仕候。從是冬ごもりのしたくに候。來春は早速御目にかゝり可申候。以上。

（良寛和尚尺牘集）

かやうな各種の文體が存したが、これらの文章の長を取り短を補つて、今日行はれる漢字交り文は出來上つたのである。

文章は、初めに在つては、文語・口語の區別は無かつたが、後、文章としては、主として古風の語脈を用ひることになり、いはゆる文語體の文章となり、これに對して口語をその儘文に綴るところのいはゆる口語文を生じた。軍記文學などにあつては文語の間に口語を交へてゐる。

今日使用せられる口語文は、大別してデアル型とマス型とに分けられる。前者は獨白文ともいふべく、演說などの折に往々にして用ひられる外、實際の口語に用ひられることは少い。これに對して後者は對話文であつて、他人に對して云ふ所の語法をその儘

用ひるものである。

以上述ぶるが如く、古人は漢字を輸入して、これが使用に苦心し、遂に假字を發明して簡便に文を作ることを得るに至つたのである。

右大將家賴朝御書に云ふ、

西國には、それより外にしたしき人も候はず候。此の春申す如く、偏に賴み入申しまゐらせ候。淡路の掃部の冠者には、定めて物語候ひつらん、心やすく候。こなた樣は皆思ふやうにしたゝめて候。近きほどに思ひたつべく候。又心やすく候はん、したしき人ひとり給はり候へ。委しくのむね申度き事候也。そなたの一門だちは何とか申候やらん、おぼつかなく候。扨色々の物給はり候。返す〳〵御心指よろこび入候。恐々謹言。

治承三、十月三日　　賴朝御判

河野四郎殿

（豫章記）

兵部卿の親王　克明親王をさす。延喜の帝は醍醐天皇。
管絃の道
殿上人　テンジヤウビト。
雜色　ザフシキ。
あながちに

二　流泉啄木

今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿の親王と申す人の子なり。よろづのことやむごとなかりける中にも、管絃の道になむ極めたりける。琵琶をも微妙に彈きけり。笛をもえもいはず吹きけり。この人村上の御時に四位の殿上人にてありけり。その時に、逢坂の關に、一人の盲、庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の御宮の雜色にてなむありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を彈き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなむ微妙に彈く。

然る間、この博雅、この道をあながちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲、琵琶の上手なる由を聞きて、彼の琵琶を極めて聞かま

かまへて
逢坂の關　昔山城と近江との境にありし關所。

ほしく思ひけれども、盲の家ことやうなれば行かずして、人を以て内々に蟬丸にいはせけるやう、「など思ひかけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし。」と。盲これを聞きて、その答をばせずしていはく、

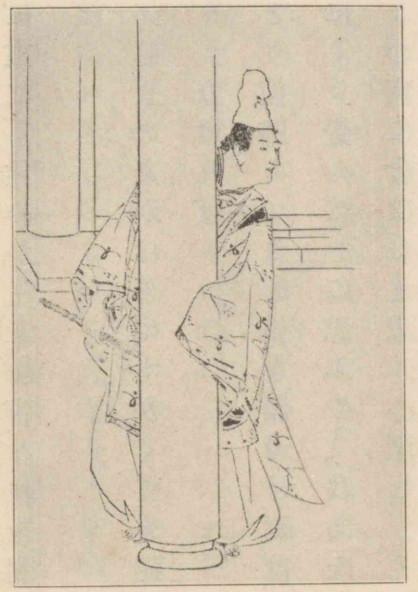
よのなかはとてもかくても過してむ宮もわら屋もはてしなければ

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心にくゝ覺えて、心に思ふやう、「我あながちにこの道を好むによりて、この盲に會はむと思ふ心深し。それにこの盲の命いつまであらむも測り難し。また我も命を知らず。琵琶に流泉・啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべきことなり。たゞこの盲のみこそこれを知りたるなれ。かまへてこれが彈くを聞かむ。」と思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸その曲を彈くことなか

りければ、その後三年の間、夜な〳〵逢坂の盲が庵の邊に行きて、この曲を今や彈く今や彈くとひそかに立聞きけれども、更に彈かざりけるに、三年といふ八月十五日の夜、月少しうは曇りて、風少しうち吹きたりけるに、博雅「あはれ今宵は興あり。逢坂の盲、今夜こそ流泉・啄木は彈くらめ。」と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶をかき鳴らして、もの哀れに思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞くほどに、盲獨り心をやりて詠じていはく、

うは曇る

心をやる



源博雅

逢坂の關のあらしのはげしきにしひてぞゐたる世をすごすとて

とて琵琶を鳴らすに、博雅これを聞きて、涙を流して、哀れと思ふこと限りなし。盲、獨言にいはく、「あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬすきものや世にあらむ。今夜心えたらむ人の來よかし。物語せむ。」といふを、博雅聞きて聲を出して、「王城に在る博雅といふものこそこれに來たれ。」といひければ盲のいはく、「かく申すは誰にかおはする。」と。博雅のいはく、「我はしか〳〵の人なり。あながちにこの道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に會ひぬ。」と。盲これを聞きて喜ぶ。その時に、博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅「流泉・啄木の手を聽かむ。」といふ。盲「故宮はかくなむ彈き給ひし。」とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこれを習ひて、返す返す喜びて、曉に歸りにけり。

これを思ふに、もろ〳〵の道は、たゞ此の如く好むべきなり。そ

すきものものずき。

かたみにたがひに。

口傳

今昔物語集
三十一卷。平安朝末期の成立。和漢天竺古今の說話を集む。作者未詳

れに近代は實に然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸卑しきものなりといへども、年頃宮の彈き給ひける琵琶を聽きて、極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりにければ、逢坂にはゐたるなりけり。それより、盲の琵琶は世に始まれるなりとなむ語り傳へたるとや。

（今昔物語）

東山の邊なる住家を出でて、逢坂の關うち過ぐるほどに、駒牽きわたる望月の頃もやう〳〵近き空なれば、秋霧立渡りて、深き夜の月影ほのかなり。ゆふつけ鳥かすかに音づれて、遊子なほ殘月に行きけむ函谷の有樣思ひ合はせらる。昔、蟬丸といひける世捨人、この關の邊に藁屋の床を結びて、常は琵琶をひきて心を澄まし、大和歌を詠じて懷ひを述べけり。嵐の風の烈しきをわびつゝぞ過しける。

いにしへの藁屋の床のあたりまでこゝろをとむる逢阪のせき

（東關紀行）

太政入道
平清盛。

人々數多云々
鹿が谷に於て平家討滅をはかりし人々をさす。即ち藤原成親・俊寛・平康頼・西光等なり。

筑後守貞能
姓は平氏。家貞の子。

保元に云々
保元の亂のこと。保元元年（一八一六）

平右馬助
清盛の叔父忠正。

新院
崇德上皇。

一の宮
崇德上皇の第一皇子。重仁親王。

刑部卿
清盛の父忠盛。

三　重盛の諫言

太政入道は、かやうに人々數多いましめおきても、なほ心ゆかずや思はれけむ、既に赤地の錦の直垂に、黑糸縅の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜の序に靈夢を蒙つて、嚴島の大明神より現に賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挾み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。

「貞能」と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋縅の鎧著て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、「いかに貞能、このことといかゞ思ふぞ。保元に平右馬助を始めとして、一門半ば過ぎて新院の御方に參りにき。一の宮の御事は、故刑部卿の殿の養君にてまし〳〵しかば、

忠盛は重仁親王の傅たり。
故院　鳥羽法皇。
平治元年云々　平治の亂のこと。平治元年（一八一九）
院　仙洞。こゝにては後白河法皇。
内　内裏。こゝにては二條天皇。
經宗・惟方　共に藤原氏。平治の亂の際、始め信頼に黨せしが、後悔いて二條天皇を奉じて六波羅に入る。
鳥羽の北殿　今の京都市下京區上鳥羽町に離宮ありき。

旁〻見はなち參らせがたかりしかども、故院の御遺誡に任せて、御方にて先を驅けたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信頼・義朝が謀叛の時、院・内を取り奉つて大内に立籠り、天下くらやみとなつたりしにも、入道隨分身を捨てゝ兇徒を追落し、經宗・維方を召しいましめしに至るまで、君の御爲に既に命を失はむとすること度々に及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思し召し捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不當人が申すことに、君のつかせ給ひて、やゝもすればこの一門滅ぼさるべきよしの御結構こそ然るべからね。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。しばらく世を鎭めむほど、法皇をば、鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせむと思ふはいかに。その

きせながの小松殿　重盛の邸。小松谷にありき。今の東山區の中。
法住寺　京都市下京區の三十三間堂の東にありき。
禪門　佛門に入りたる男子の稱。禪尼の對。こゝは清盛をさす。
西八條殿　清盛の邸宅。

儀ならば、定めて北面のものどもが中より矢をも一つ射むずらむ。その用意せよと、侍どもに觸るべし。大方は、入道、院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍置かせよ。きせながが取出せ。」とこそ宣ひけれ。

主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ馳せ參つて、「世ははやかう候。」と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、「嗚呼、はや成親卿の頭の刎ねられたんな。」と、宣へば、「その儀にては候はねども、入道殿のおんきせながを召され候上は、侍どもも皆打立つて、只今院の御所法住寺殿へ寄せむとこそ出で立ち候ひつれ。暫く世を鎭めむほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせむとは候へども、内々は鎭西の方へ流し參らせむとこそ擬せられ候ひつれ。」と、申しければ、大臣、何によりて只今さることのおはすべきとは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂ほしきこともやおはすらむとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。

卿相・雲客
受領　ジユリヤウ。又はズリヤウ。國司の實務に携はる者。
衞府　左右の近衞・兵衞・衞門府の稱。
へうずる
內府
五戒　殺生戒・偸盜戒・邪淫戒・妄語戒・飲酒戒。
五常　仁・義・禮・智・信。
面はゆし

門前にて車より下り、門の內へさし入つて見給ふに、入道腹卷を著給ふ上、一門の卿相・雲客數十人、各〻色々の直垂に思ひ〳〵の鎧著て、中門の廊に二行に著かせられたり。その外、諸國の受領・衞府・諸司などは、緣にゐこぼれ、庭にもひしとなみゐたり。旗・竿など引きそばめ引きそばめ、馬の腹帶をかため、冑の緒をしめ、只今皆打立たむずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子・直衣に大紋の指貫のそば取つてさやめき入り給へば、ことの外にぞ見えられける。

入道伏目になつて、「あはれ、例の內府が世をへうずるやうに振舞ふものかな、大きに諫めばや。」と思はれけれども、さすが子ながらも、內には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を紊らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹卷を著て對はむこと、さすが面はゆう恥づかしうや思はれけむ、障子を少し引立て、腹卷の上に素絹の衣をあわて著に著給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見

邊地粟散の境
天兒屋根命　藤原氏の祖。天照大神に臣事し天孫降臨の時に隨從せり。

えけるを隱さうと、頻りに衣の胸を引違へ〳〵ぞし給ひける。

大臣は舍弟宗盛卿の座上に著き給ふ。入道宣ひ出さるゝこともなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

やゝあつて、入道宣ひけるは、「あの成親卿が謀叛は事の數にも候はず。一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めむほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずば、これへまれ御幸なし參らせむと思ふはいかに。」と、宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はら〳〵とぞ泣かれける。

入道、「さて、いかにや、いかに。」と、あきれ給へば、稍〻あつて、大臣涙を押へて、「この仰せ承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かむとては、必ず惡事を思ひ立ち候なり。また御有樣を見參らせ候に、更に現とも覺えず候。さすが我が朝は、邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御

弓箭を帶す

破戒無慙

普天の下
詩經、小雅に、「普天之下、莫レ非ニ王土一、率土之濱、莫レ非ニ王臣一。」とあり。

潁川云々
許由を指す。

首陽山云々
伯夷・叔齊を指す。

蓮府槐門
レンプクワイモン。大臣の意。

進止
シンジ。支配。

末、朝の政を掌らせ給ひしよりこのかた、太政大臣の官に至る人の甲冑を鎧ふこと、禮儀を背くにあらずや。就中御出家の御身なり。法衣を脱捨てゝ、忽ちに甲冑を鎧ひ弓箭を帶しましまさむこと、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁・義・禮・智・信の法にも背き候ひなむず。旁〻恐ある申し事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきにも候はず。まづ世に四恩候。天地の恩・國王の恩・父母の恩・衆生の恩これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王地にあらずといふことなし。されば、かの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命の背きがたき禮儀をば存知すとこそ承れ。いかに況んや、先祖にもいまだ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て、蓮府槐門の位に至る。加之、國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ稀代の朝恩にあらずや。今、此等の莫大の御恩を思

神は非禮を受けず
禮記に出づ。

聖德太子
廐戸皇子。用明天皇の第一皇子。推古天皇二十九年薨。御年四十九。（一二三三—一二八一）
人皆心あり云々
十七條憲法第十條に、「人皆心有リ、心各〻執有リ、彼是ナレバ則チ我非ニ、我必ズ聖ヲ非トセバ、彼必ズ愚ヲ非トス、共ニ是レ凡夫ノミ、是非ノ理、誰カ是レ定ムベキ、共ニ賢愚、鐶ノ端ナキガ如シ。是ヲ以テ彼ノ人瞋ルト雖モ還タ我ガ失ヲ恐ル。」

し召し忘れさせ給ひて、亂りがはしく法皇を傾け參らせ給はむこと、天照大神・正八幡の神慮にも背かせ給ひ候ひなむず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。然れば、君の思し召し立たせ給ふところ、道理半ばなきにあらず。中にもこの一門は、代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎭めし事は無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。聖德太子十七箇條御憲法に『人皆心あり。心各〻執あり。彼を是し我を非し、我を是し彼を非す。是非の理誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の如くにして端なし。爰を以て、たとひ人怒るといふとも、却つて我が咎を懼れよ。』とこそ見えて候へ。然れども當家の運命未だ盡きざるによつて、御謀叛已に露れさせ給ひ候ひぬ。その上仰せ合はせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも何の恐か候べき。所當の罪科行はれ

冥慮

敍爵

千顆萬顆の玉　和漢朗詠集菅原文時の詩に、「瑩レ日（キニ）瑩レ風（クニ）、高低千顆萬顆之玉。染レ枝（ヲムニ）染レ浪、表裏一入再入之紅。」とあるによる。

ぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈〻奉公の忠勤を盡し、民の爲には益〻撫育の哀憐を致させ給はゞ、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明佛陀感應あらば、君も思し召しなほすこと、などか候はざるべき。君と臣とを比ぶるに、親疎分く方なし。道理と僻事とを竝べむに、いかでか道理に附かざるべき。之は尤も君の御理にて候へば、叶はざらむ迄も院中を守護し參らせ候べし。その故は、重盛初め敍爵より今大臣の大將に至る迄、併しながら君の御恩ならずといふことなし。その恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずるに、一入再入の紅にもなほ過ぎたらむ。然らば院中に參り籠り候べし。その儀にて候はゞ、重盛が身に代り命に代らむと契りたる侍ども少々候らむ。これらを召具して、院の御所法住寺殿を守護し參らせ候はゞ、さすが以ての外の御大事にてこそ候はむず

迷廬八萬　高さ八萬四千由旬ありといふ。須彌山のこと。

蕭何　前漢の創業の功臣。漢の三傑と稱せらる。

高祖　劉邦。前漢第一世の帝。（—西暦前一九五）

先蹤　センショウ。

再び實なる木云云　淮南子に、「夫再（レビ）實（ナルル）之木、根必傷（メム）。」とあるによる。

らめ。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さむとすれば、迷廬八萬の巓よりも尙高き父の恩忽ちに忘れむとす。痛ましきかな、不孝の罪を逃れむとすれば、君の御爲には已に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これきはまれり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、たゞ重盛が首を召され候へ。その故は、院參の御供をも仕るべからず、また院中をも守護し參らすべからず。されば、かの蕭何は大功かたへに越えたるによりて、官大相國に至り、劍を帶し沓を履きながら殿上へ昇ることを許されしかども、叡慮に背くことありしかば、高祖重う戒めて深う罪せられにき。かやうの先蹤を思へば、富貴といひ榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁〻極めさせ給ひぬれば、御運の盡きむこと難かるべきにあらず。富貴の家には祿位重疊せり、再び實なる木はその根必ず傷むと見えて候。心細くこそ候へ。いつまでか命生きて、亂れむ世をも見候べき。

果報

たゞ末代に生を受けて、かゝる憂き目に遭ひ候重盛が果報のほどこそ拙う候へ。只今も侍一人に仰せつけられ、御壺の内へ引出されて、重盛が頭の刎ねられむずることは、いと易きほどの御事にこそ候はむずらめ。これを各〻聞き給へ。」とて、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめ〴〵と泣き給へば、その座に竝みゐ給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡らされける。

（平家物語）

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず、たゞ春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ。偏に風の前の塵に同じ。（中略）近く本朝を窺ふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これらは驕れることも、猛き心も、皆とりどりなりしかども、間近くは、六波羅の入道前の太政大臣平清盛公と申しし人の有様、傳へ承るこそ、心も言葉も及ばれね。

（平家物語）

四　平家の末路

一題の遺詠に云云　平家都落の際、忠度京都に引返し藤原俊成の門を叩き、遺詠一卷を託す。後故郷の花と題する一首千載集に選ばれしことを指す。

恩愛にほだされては云々　維盛が都に留め置きし妻子に戀々たりし事を指す。

一　清盛

世にも哀れなるは平家とぞいふめる。まことに此の一門の盛衰を考ふれば、心も言葉もなか〳〵に及ばざりけり。案ずれば、一旦の榮華に耽りて、百年の計を思はず、秋の嵐の吹荒ばんずる朝も、春の夜の夢なほ朧にして、覺めての後は、さすがにうき世と觀じても、先世・後代既に桜をかへたるを如何にすべき。今を昔にかへさんすべもかた絲の、よりくづれたる世こそ、かへすゞ〳〵も是非なけれ。

されば、風雅にかくれては、一題の遺詠に今生の本懷を終へ、恩愛にほだされては、己が身の現在に來世の果報を思はず。哀れは桐の一葉に散初めて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば奇

しきまでに哀れなりける運命かな。

さるにても入道相國こそなか〳〵に面白き男なりけれ。弓矢のいさをし早畢んぬ。朝家の權柄今はた盛りなり。一門殿上に昇りて六十餘人、私封全國に亙りて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗皆こゝに集まる。昔は殿上の交りをだに嫌はれし人、今は「此の人ならでは人にあらじ。」とうたはれ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏これがために目を欹つるばかりなり。

平清盛肖像と筆蹟

されば、十善の帝王畏くも外戚の威におされ給ひ、八幡・賀茂の御幸は、八重の潮路を嚴島へとぞ觸れられける。なにがしの卿が、「入る日をも招きかへさんずる勢。」と書かれしも、げにことわりなりきと

權柄
ケンペイ。

攝籙
攝政の異稱。

成敗

賀茂
上下の二社あり。賀茂別雷命・玉依姫を祀る。上社は京都市上京區上賀茂、下社は上京區賀茂糺の森にあり。官幣大社。

嚴島
廣島縣佐伯郡嚴島町にあり。市杵島姫を祀る。官幣中社。

ぞ覺ゆる。

不敵なる入道は、私門の榮に飽きたらで、世に人なきやうに振舞はれけるこそゆゝしけれ。茲に卿相雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人。法皇の御身を以てしても、城南の離宮に射山の嵐を偲ばせ給ふ。中にも、重代の帝座俄かに動きて、愛宕（おたぎ）の里の哀れをとゞめけるこそ、なか〳〵にあさましかりしか。

咲きも殘らず、散りも始めぬ櫻花、嵐なくともかくてやはやむべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に萌黃匂の鎧著て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀帶佩こそ、あつぱれ平門隨一の貴公子にはあんなれど、富士川の水禽に算を亂しゝ十萬餘騎は、徒に後世の笑をとゞめたるに過ぎず。加ふるに、俄かに雲亂れて、木曾の山氣漸く都に逼り、兩山の衆徒亦既に反覆の色を示しぬ。平家の運命日に益〻急なり。

卿相雲客
射山
藐姑射山の略。上皇御所の稱。

重代の帝座云々
治承四年（一八四〇）の福原遷都を指す。

愛宕の里云々
平家物語に、「百年を四かへりまでにすぎ來にし愛宕の里の荒れやはてなむ。」とあるによる。

維盛
平重盛の長子。歿年未詳。

算を亂す

兩山の衆徒
比叡山と奈良との僧徒達をいふ。

保平のいさをし　保元・平治二亂の戰功をいふ。

恩愛の絆

六慾煩惱　欲求ゴング。

時しも入道は病に罹りぬ。あはれ病の床の寂しきに、霜夜の鐘の響の枕に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至るまで、三十餘年の過去を靜かに憶ひ出でたる時、而して命の際のこの身ぞと觀じたる時、かれ果して如何の感慨をか催しけん。一代の榮華身に餘りて、保平のいさをし又言ふに足らずと思はざりしか。己につらかりし人々を、かくまでに惱ましゝことの罪深かりきとは思はざりしか。幾度か帝座を驚かし奉りしはては、軍兵を擁して法皇を幽閉しまゐらせしことの、中にも非道の所行なりしを思はざりしか。更に小松の内府が、身命にかへて乃父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆にうたゝ悔恨の心をうごかすこと無かりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事の際に、今生の名利を棄てゝ、未來の淨樂を欣求する一念を發する事無かりしか。皆あらず。入道は死に至るまで、其の初念を翻す事あらざりき。彼は正にその生けるが如くにして死したりき。

南都の餘燼　治承四年（一八四〇）十二月、平重衡奈良東大寺・興福寺を燒く。

墨股の勝鬪　養和元年（一八四一）三月、平知盛等、源行家を尾張國墨股に討ち大いにこれを破る。

信越俄かに云々　養和元年（一八四一）平氏屢〻義仲に破らる。

比叡の云々　壽永二年（一八四三）七月、義仲入京して延曆寺に據る。

二　都落

凡そ人の世に傳へ遺されし史は多かれど、平家の都落ばかり、あはれにもまた目覺ましきは無かるべし。

南都の餘燼未だ冷めず、墨股の勝鬪尙響きぬるに、信越俄かに雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたに充ち滿ちぬ。宇治・淀の備もろくも潰えて、都も今を限りとぞ見えし。あはれ、一門の天下身を置くに處なし。世はかく憂きに、み吉野のあなたに隱家も無きか。いざさらば已みなん。都の中にていかにもならんよりは、西國の行幸に一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死も知らぬ別路に、人のあはれの限りもなし。またかへり來べき都としも思はねばにや、六波羅・池殿・西八條以下、一門・譜第の邸宅・宿房、京・白川の四五

萬家をあはせて、一炬の煙となし果てぬるこそあわたゞしかりしか。

こゝに鳳闕の礎空しく殘り、椒房の嵐夜々悲しむ。保元此の方、天下の榮華をつくしたる花の都の故郷を、燒野の原と顧みて、末は煙の浪路をば、行方も知らずさすらふらん。直衣、束帶の身にも今は黑金の衣を著けたれども、誰かは詠歌の餘哀になれて、弓矢の譽を勵むべき。さてもすて難き命や。今こそは憂世なれ。流石にしのばるゝ昔の樣の夢に入るをば如何にせん。翠華搖々として西に向へば、秋風到る處の野に滿てり。嗚呼、昨日は東關のもとに轡を竝べて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人。行手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づる山の端を、あなたの空とやおぼしけん、日暮舷に笛吹く人あり。響は

み吉野の云々　古今集に詠人不知として、「み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれ家にせむ。」とあるによる。

西國　壽永二年（一八四三）七月、宗盛等天皇を奉じて西海に走る。

椒房　セウバウ。

故郷を云々　平家物語、平經盛の歌に、「ふるさとを燒野が原とかへりみて末も煙の浪路をぞ行く。」とあるによる。

黑金の衣　弓矢の譽

翠華　スヰクワ。

三軍

遠く煙波を掠めて、三軍齊しく耳を欹つ。嗚呼、此の時、此の人、想果して如何。

（高山樗牛―樗牛全集）

明けぬれば福原の內裏に火をかけて、主上を始め參らせて、人々皆御船に召す。都を出でし程こそ無けれども、これも名殘は惜しかりけり。海士の燒く藻の夕煙、尾上の鹿の曉の聲、渚々に寄する波の音、袖に宿かる月の影、千草にすだく蟋蟀のきり〳〵す、すべて目に見耳にふるゝことの、一つとして、哀を催し心を傷ましめずといふ事なし。昨日は東關の麓に鑣を竝べて十萬餘騎、今日は西海の波の上に纜を解いて七千餘人、雲海沈々として、青天既に暮れなむとす。孤島に夕霧隔てて、月海上に浮べり。極浦の浪を分け、汐にひかれてゆく船は、半天の雲に遡る。日數經れば、都は山川程を隔てて、雲居のよそにぞなりにける。遙々來ぬと思へども、唯盡きせぬものは涙なり。波の上に白き鳥の群れ居るを見給ひては、彼ならむ、在原のなにがしの隅田川にて言問ひけむ、名もむつまじき都鳥かなと哀れなり。壽永二年七月二十五日に平家都を落ちはてぬ。

（平家物語）

五　落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、樣々に陳じ申されし趣、げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、專ら陰謀の企、彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さゞるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも許されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと、思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に蹈迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を著て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寢となれば物憂きに、恩愛の契あさからぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ心の中ぞ哀れなる。

憂きをば留めぬ逢坂の關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮沈み、駒もとゞろと踏鳴らす、勢多の長橋打渡り、行き交ふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀れなり。時雨もいたく守山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見え分かず。物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧みる、古郷を雲や隔つらむ。番場・醒が井・柏原、不破の關屋は荒れはてゝ、猶もる物は秋の雨。いつか我が身の尾張なる、熱田の八劍伏拜み、汐干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰か哀れとゆふ暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に著き

俊基朝臣
藤原氏。後醍醐天皇の寵眷を得藤原資朝と共に興復の謀に參し事露れ北條高時のために捕へらる。辯疏して漸く解く。後に又僧文觀の陳述によりて再び捕へられ、元弘二年（一九九二）鎌倉にて殺さる。

再犯
サイボン。

七月
元弘元年。

交野の春云々
新古今集藤原俊成の歌に、「又やみむ交野のみ野の櫻がり花の雪ちる春の曙」。交野は今の大阪府北河内郡にあり。

紅葉の錦云々
拾遺集藤原公任の歌に、「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき。」

逢坂の關云々
拾遺集紀貫之の歌に、「あふ坂の關の清水にかげ見えて今やひくらむ望月の駒。」

うねの野云々
古今集詠者未詳の歌に、「近江より朝立ちくれば、うねの野にたづぞ鳴くなるあけぬこの夜は。」

時雨もいたく云云
古今集紀貫之の歌に、「白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり。」

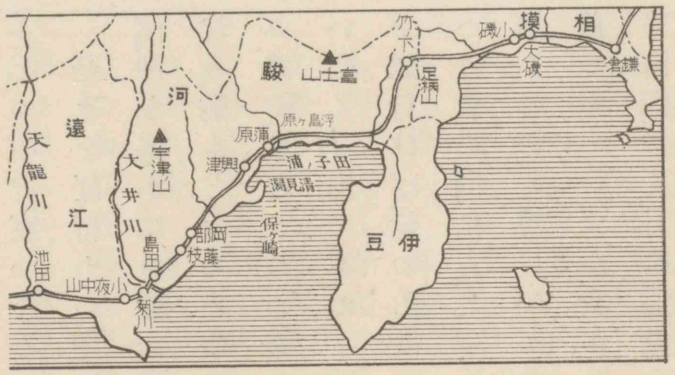
鏡の山は云々
古今集大伴黑主の歌に、「鏡山い

ざ立ちよりて見て行かむ年經ぬる身は老いやしぬると。」

汐干に今や　新古今集藤原季能の歌に、「さよ千鳥聲こそ近くなるみ潟傾く月に潮やみつらむ。」

重衡中將　左近衛中將。清盛の子。壽永三年一の谷の戰に捕へられ、翌文治元年（一八四五）木津川に斬らる。

命なりけり　云々　新古今集西行法師の歌に、「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山。」



給ふ。

元暦元年の頃かとよ。重衡中將の東夷の爲に囚はれて、此の宿に著き給ひしに、

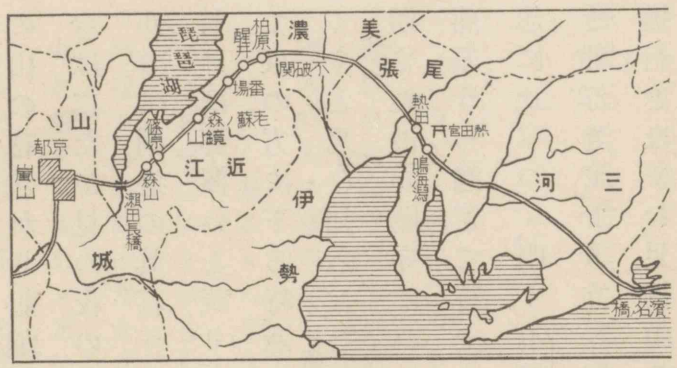
東路のはにふの小屋のいぶせきに
ふる里いかに戀しかるらむ

と、長者の女が詠みたりし、其の古の哀れまでも、思ひ殘さぬ涙なり。

旅館の燈かすかにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家鄉の天を望みても、昔西行法師が、「命なりけり」と詠じつゝ、二たび越えし跡までも、羨しくぞ思はれける。　隙行く駒

光親卿　吾妻鏡第二十五に菊川にて中納言宗行の殺されし記事見ゆ。光親卿は作者の思ひ違ひならむ。光親卿は藤原光雅の子。承久の役に、院宣を作り、義時の罪を鳴らし、事破れて執へらる。駿河加古阪に斬らる。（一八八一）

南陽縣の句　藤原宗行の作。



の足早み、日已に亭午に昇れば、餉まゐらするほどとて、輿を庭前に舁き止む。　轅をたたきて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と、答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎に依りて、光親卿、關東へ召下されしが、此の宿にて斬られし時、

昔南陽縣菊水、　汲下流而延齡。
今東海道菊川、　宿西岸而終命。

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいとゞ增りけむ、一首の歌を詠じて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川のおなじ流に身をや沈

龜山殿　今の京都市右京區にありし龜山の離宮。

夢にも人に云々　伊勢物語の歌に、「駿河なるうつの山べのうつつにも夢にも人のあはぬなりけり。」

富士の高嶺を云々　新古今集藤原家隆の歌に、「富士の嶺の煙もなほぞ立ちのぼる上なきものは思なりけり。」

めむ

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花ざかり、龍頭鷁首の船に乘り、詩歌・管絃の宴に侍りし事も、今は二たび見ぬ夜の夢と成りぬと思ひ續け給ふ。　嶋田・藤枝にかかりて、岡邊の眞葛うら枯れて、もの悲しき夕暮に、宇都の山邊を越行けば、蔦・楓いと茂りて道もなし。　昔、業平の中將の、住處を求むとて、東の方に下る時、「夢にも人に逢はぬなりけり。」と詠みたりし、もかくやと思ひ知られたり。　清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、向ひはいづこ三保が崎、興津・蒲原うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過行けば、汐干や淺き船浮きて、おり立つ田子のみづからも、浮世を廻る車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯・小磯見おろして、袖にも波はこ

ゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ著き給ひけれ。

（太平記）

このごろ都にはやるもの、夜討・强盜にせ綸旨・召人・早馬・から騷動・生頸・還俗・自由出家・俄大名・迷ひもの・安堵・恩賞・から軍・本領はなれし訴訟人・文書入れたる細つゞら・追從・讒人・禪律僧・下剋上する成出者・器用の堪否沙汰もなく、漏るゝ人なき決斷所・著つけぬ冠・上の衣・持ちも習はぬ笏持ちて、內裏まじはり珍らしや、賢者顏なる傳奏は、われも〳〵と見ゆれども、巧なりける詐は、愚かなるにや劣るらむ。　させる忠功なけれども、過分の昇進するもあり、定めて損ぞあるらむと、仰ぎて信をとるばかり、天下一統めづらしや。　御代に生まれてさま〴〵の、ことを見聞くぞ不思議なる。　京童べの口ずさみ、十分一をもらすなり。

（建武年間記）

折ふし　季節。
物のあはれ
けしきだつ

六　季節の興趣

一　折ふしの移りかはり

折ふしの移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ。」と、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮きたつものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどかなる日かげに、垣ねの草萌出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう〳〵けしきだつ程こそあれ、折しも雨風うち續きて、心あわたゞしく散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにたゞ心をのみぞなやまし。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古のことも立ちかへり戀しう思ひ出でらる。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすて難きこと多し。

灌佛　四月八日。釋迦の誕生日の法會。
祭　賀茂の祭。四月の中の酉の日。今日にては五月十五日に擧行せらる。
菖蒲葺く　五月五日の節句に、毒氣を退くる意味にて家々の軒に菖蒲を挿すことをいふ。
六月祓　夏祓・名越祓ともいふ。六月の晦日に行ふ。
棚機祭　七月七日の星祭をいふ。
わさ田

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに茂りゆく程こそ、世のあはれも、人の戀しさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水鷄の叩くなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顏の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなどとりあつめたる事は秋のみぞ多かる。また野分の朝こそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じこと又今更にいはじとにもあ

賀茂祭

あぢきなきすさび

遣水
細き流を庭に堰き入れて流したるもの。

御佛名
十二月十九日より三日間宮中にて行はるゝ佛事。

荷前の使
毎年朝廷に於て十二月の吉日を選び、諸國より奉る貢穀の荷の初穂を諸陵墓に奉らる。

らず。おぼしき事いはぬは腹ふくるゝ業なれば、筆にまかせつゝあぢきなきすさびにて、搔いやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けける朝、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてゝ、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細きものなれ。御佛名・荷前の使立つなどぞ、あはれにやむごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて、催し行はるゝさまぞいみじきや。追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ。

つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門たゝき走りありきて、何事にかあらむ、ことゞ〳〵しくのゝしりて、足を空にまどふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ぼそけれ。亡き人の來る夜とて、魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方にはなほすることにてありしこそあはれなりしか。

魂祭
もと七月十四日と十二月晦日との二回に行はれしが、此の頃已に七月一回になれり。

かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍らしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

雨にむかひて云云
和漢朗詠集中源順の、「對雨戀月序。」といふ辭句より取りしものなるべし。

たれこめて云々
古今集藤原因香の歌に、「たれこ

二　花はさかりに

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌のことばがきにも、「花見にまかれりけるに、はやく散り

めて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり。」とあり。

かたくなゝる人　下品にしてもののわからぬ人。

心深う　情趣深く。

椎柴　椎の木のむれ立てるをいふ。

心あらむ友

過ぎにければ」とも、「さはることありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くをしたふならひは、さることなれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝かの枝、散りにけり。今は見どころなし。」などはいふめる。

よろづのことも、はじめ終りこそをかしけれ。望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴、しらがしなどのぬれたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都こひしうおぼゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立去らでも、月の夜はねやの中ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

色こく

あからめ

祭　賀茂の祭。

見ごと　見るべきこと、すなはち祭の行列などをさしていふ。

棧敷　サンジキ。見物のために高く造れる床。

よき人は、ひとへにすけるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢより、立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大きなる枝、こゝろなく折取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおり立ちて跡つけなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。

さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見ごといとおそし。そのほどは棧敷不用なり。」とて、奥なる屋にて酒飲み、ものくひ、圍碁・雙六など遊びて、棧敷には人を置きたれば、「渡りさぶらふ。」といふ時に、おの〳〵肝つぶるゝやうに、爭ひ走り上りて、落ちぬべきまで簾はり出でて、押しあひつゝ、ひとことも見もらさじとまもりて、「とあり、かゝり。」と、ものごとにいひて、渡り過ぎぬれば、「また渡らむまで。」といひて下りぬ。たゞものをのみ見むとするなるべし。

ゆゝしげなる

わりなく

葵かけわたして　賀茂の祭には、簾や柱に葵をかくるを以て云ふ。

牛飼　牛車の牛を使役する身分ひくき者。

らうがはしさ　混雜せるさま。

都の人のゆゝしげなるは、ねぶりていとも見ず。若く末々なるは、宮づかへに立ちゐ、人のうしろにさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず、わりなく見むとする人もなし。

何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明けはなれぬほど、しのびて寄する車どものゆかしきを、それか、かれかなど思ひ寄すれば、牛飼・下部などの見知れるもあり、をかしくも、きら〳〵しくも、さまざまに行きかふ、見るもつれ〴〵ならず。暮るゝほどには、立てならべつる車ども、所なく竝みゐつる人も、いづ方へ行きつらむ、程なく稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾・たゝみもとり拂ひ、目の前にさびしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られてあはれなれ。

（吉田兼好―徒然草）

莊周が夢も云々　莊子齊物篇に、「昔者莊周夢爲ニ胡蝶一、栩々然胡蝶也。自喩適レ志與、不レ知レ周也。俄然覺則蘧々然周也。不レ知下周之夢爲ニ胡蝶一與、胡蝶之夢爲レ周與上。」

古今の序に云々　古今集の紀貫之の序に、「花になく鶯、水にすむ蛙の聲をきけば生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。」

古池に云々　芭蕉の句、「古池や蛙とびこむ水の音。」

七百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそ猶めでたけれ。さてこそ莊周が夢もこの物には託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風靜まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、このものゝこと、更にも謗りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふことを聞かず、この者ばかり初蟬といはるゝこそ大いなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず。」と、このものゝ上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

やがて死ぬ云々　芭蕉の句、「やがて死ぬけしきも見えず蟬の聲。」

貧の學者云々　晉書の車胤傳に、「胤字武子、幼恭勤博覽。貧不常得油。夏月以練囊盛數十螢火照書讀之以夜繼日。」

歌に螢火云々　ほたるのほは、火の意にて螢火とつゞくることを中世以後歌道にて禁ぜしをいふ。

退隱の媒　金樓子に、「楚國龔舍、初隨王朝、宿未央宮、見蜘蛛大如栗。四面縈羅網。有蟲觸之而死。舍乃歎曰、吾生亦如此耳、仕宦者人之羅網也、豈可久淹歲。於是挂冠而退。時人謂之爲蜘蛛之隱。」

賴光　源滿仲の子。勇武當時に冠たり。治安元年（一六八一）歿。

槐安の都　書言故事に、「異聞集曰、淳于芬醉夢入大槐安國、見王。王曰、南柯郡屈卿爲守。居凡二十載、使者送出穴遂寤。尋古槐下蟻穴洞然

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇はたゞこのものゝ爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にとられて、油火の代りにせられたるは、このものゝ本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、ことの外の不自由なり。俳諧にはこの眞似すべからず。

茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならむ。つくゝぼふしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛は巧に網を結んで、潛まつて物を害せむとす。昔、退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていと憎し。古代、朝敵の初めとして、賴光をさへおびやかしたる、いと恐ろし。さはいへ廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけ捨てたるは、聊かあはれ添ふる

折もあらむか。彼はかひがひしく巢作りてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、くもとはいかでいふやらむ。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲は誰が爲に身を焦すや。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は物ずきの謗となれり。同じ實の名によばれて、玉蟲はやさしく、黃金蟲はいやし。

蟻は明暮に忙しく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたより惡しきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に嚙まるゝ蚤はたまゝにして、猿の手にさぐらるゝ虱は逃るゝこと難かるべし。

蝸牛は只水にあるべきものゝ、いかで草葉に遊ぶらむ。家は持

明朗、乃槐安國。又一穴直上南枝、即南柯郡也。」

千丈の云々　韓非子に、「千丈之堤、以螻蟻之穴潰。」

歐陽氏　名は修。支那宋時代の文人。古文眞寶後集に、「憎蒼蠅賦。」あり。

長嘯子　木下勝俊。字は大藏。若狹小濱の城主。和歌をよくす。慶安二年歿。年八十一。（一二二九—二三〇九）

原　今の靜岡縣駿東郡原町。

ちたれども、行く先々を負ひ歩くは、雲水の安きにも似ず。

蛇・蚯蚓の足なくても歩むべくは、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蟷螂の痩せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこの類はあるべし。

蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕籠に乘りて富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲は、その音の似たるを以て名によばる。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯らし、人に疎まる。一つ在處に二人の八兵衛ありて、一人は後生をねがひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

きりぐすのつゞり刺せとは、人のために夜寒を教へ、藻に棲む

吉原　同縣富士郡吉原町。

つゞり刺せ云々　古今集在原棟梁の歌、「秋風に綻びぬらし藤袴つづりさせてふきりぎりすなく。」

われから云々　古今集藤原直子の歌、「あまの刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそなかめ世をばゆめみじ。」

七賢　晉の嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎の七人。所謂竹林の七賢。

横井也有　名は時般。俳人。尾張侯に仕へし重臣。天明三年歿。年八十二。（一三六二—一四四三）

蟲は、われからとたゞ身の上をなげくらむを、蓑蟲のちゝよ〳〵と呼ぶは、父をのみ戀ひて、などかは母をば慕はざらむ。

蚊は憎むべきかぎりながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕べ、始めてほのかに聞きたる、又は長月の頃、力なく殘りたるは、寂しきかたもあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やり焚く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。

（横井也有—鶉衣）

蟻と蟻うなづきあひて何かことありげにはしる西へ東へ

蝗まろうるさく出でて飛ぶ秋のひより喜び人豆を打つ

（橘　曙覽）

奥の細道
一卷。松尾芭蕉の紀行文。
月日は云々
古文眞寶後集に李太白の春夜宴ニ桃李園ニ序トスルノ（レハ）して、「夫天地者ノ（ニシテ）萬物ノ逆旅ナリ、光陰者百代過客ナリ」とあるによる。過客は旅人。
去年の秋
元祿元年（二三四八）信濃の更科を經て江戸に歸りし時。
江上の破屋
隅田川の邊なる深川の芭蕉庵。
白河の關
福島縣西白河郡古關村にありき。
そゞろ神
人の心を誘惑する魔神。
松島
宮城縣宮城郡の東北にある灣。

八　奥の細道抄

一　月日は百代の過客

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年より か、片雲の風にさそはれて漂泊の思やまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の關越えむと、そゞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取る物手につかず、股引の破れをつゞり、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞ雛の家

杉風
俳人。名は杉山一元。江戸の人。採茶庵と號す。芭蕉の後援者として聞ゆ。享保十七年歿。年八十六。（二三〇七—二三九二）
面八句
オモテハツク。四枚の懷紙に連句を記す時、初めの紙の表には八句しるすをいふ。
月は云々
源氏物語帚木の卷に、「月は有明にて光をさまれるものから、影さやかに見えてなかゝをかしき曙なり。」
谷中
東京市下谷區。
千住
江戸時代、奥州街道の最初の宿驛。今東京市足立區。

面八句を庵の柱に懸置き、彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峯かすかに見えて、上野・谷中の花の梢又いつかはと心細し。睦まじきかぎりは宵より集ひて、船に乘りて送る。

二　別離

千住と云ふ處にて船をあがれば、前途三千里の思、胸にふさがりて、まぼろしの巷に離別の涙を濺ぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

これを矢立の始めとして、行く道なほ進まず。人々途中に立ちならびて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚只かりそめに思立ちて、吳天に白髮の恨を重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見ぬ境、若し生きて歸らばと、定めなき頼の末をかけ、其の日やう〳〵草加とい

三千里云々　源氏物語須磨の卷に、「來し方の山は霞遙かにてまことに三千里の外のこゝちするに。」とあり。

矢立の始め　呉天云々　白樂天の詩に、「去年九月到ニ東洛一。今年九月來ニ呉郷一。兩邊蓬鬢一時白。三處菊花同色黄。」

草加　埼玉縣北足立郡草加町。

身すがらに　身一つで何も持たずに。

紙子　カミコ。紙製の衣。

さり難き　よんどころなき。

いかで云々　拾遺集平兼盛の歌、「たよりあらばいかで都につげやらむ今日白河の關は越えぬと。」

三關　奥羽三關。うやむやの關・鼠の關・白河の關。

風騒の人　詩歌の道にたづさはれる人。

秋風を云々　後拾遺集能因法師の歌、「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關。」

紅葉を云々　千載集源頼政の歌、「都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の關。」

古人云々　清輔の袋草子に竹田大夫國行といふ者陸奥に下向の時、白河の關を過ぎんとし

ふ宿にたどり著きにけり。痩骨の肩に懸れる物先づ苦しむ。只身すがらにと出立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨筆のたぐひ、あるはさり難きはなむけなどしたるは、さすがに打捨て難くて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。

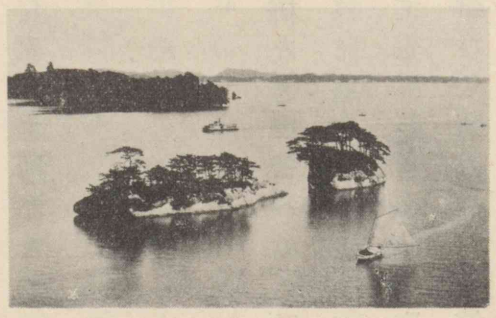
三　白河の關を越ゆ

心許なき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて、旅心定まりぬ。いかで都へと便り求めしも理なり。中にも、此の關は三關の一にして、風騒の人、心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほ哀れなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆるこゝちぞする。古人冠を正し、衣裝を改めしごとなど、清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴著かな　曾良

四　松島

抑〻ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡して、欹つものは天を指し、臥すものは波に匍匐ふ。或は二重に重なり、三重に疊みて、左に分れ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉潮風に吹き撓められて、屈曲おのづから矯めたるが如し。其の氣色、窅然として美人の顏を裝ふ。ちはやぶる神の昔、大山つみのなせる業にや。造化の天工、いづれの人か筆を振ひ、詞を盡さむ。



松島

雄島が磯は、地つゞきて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、座禪石などあり。はた松の木蔭に、世を厭ふ人もまれ〳〵見

て、能因の歌を憶ひ、いかで平服姿にて越ゆべきとて裝束を改めたる由見ゆ。

清輔　藤原清輔。歌人。正四位皇太后宮大進に到る。治承元年歿。年七十四。（一七六四—一八三七）

曾良　名は河合惣五郎。俳人。信濃の人。芭蕉の門人。寶永七年歿。年六十。（二三一一—二三七〇）

扶桑　日本國の異名。

浙江　セツカウ。支那浙江省杭州府にある川。杭州灣の潮の江中に逆流するより、古來浙江の潮として有名なり。

皆然　エウゼン。

え侍りて、落穗・松笠など打煙りたる草の庵、閑かに住みなし、如何なる人とは知られずながら、まづなつかしく、立寄るほどに、月海にうつりて、晝の眺また改まる。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ、あやしきまで妙なるこゝちはせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

五　平泉

十二日、平泉とこゝろざし、姉葉の松・緒絶の橋など聞傳へて、人跡稀に、雉兎・蒭蕘の往きかふ道、そこともわかず、終に道ふみたがへて石の卷といふ港に出づ。「黄金花さく」と、詠みて奉りたる金華山、海上に見渡し、數百の廻船入江に集ひ、人家地を爭ひて、竈の煙たち續けたり。思ひかけずかゝる處にも來れるかなと、宿からむとすれど、更に宿かす人なし。漸うまどしき小家に一夜を明かして、明く

大山つみ　大山祇神。山嶽を司る神。

雄島　松島灣の一島。松島村に屬す。

雲居禪師　ウンゴゼンジ。京都妙心寺の禪僧。後伊達政宗に迎へられ松島瑞巖寺に移り中興の祖となる。萬治二年歿。年七十八。（一二二四—一二三一九）

平泉　岩手縣西磐井郡の村。

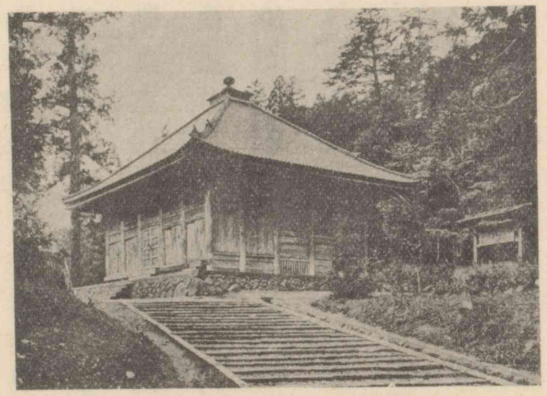
姉葉の松　宮城縣栗原郡澤邊村大字姉歯にありし名松。

緒絶の橋　同縣志田郡古川町にある橋。

雉兎　チト。

蒭蕘　スウゼウ。草を刈り薪を採る者。

れば、また知らぬ道まよひ行く。袖のわたり・尾ぶちの牧・まのゝ萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に至る。



金色堂

その間、二十餘里ほどとおぼゆ。

三代の榮耀、一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形をのこす。先づ高館に上れば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔てゝ南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠打敷

石の卷　宮城縣牡鹿郡の町。
黄金花さく　萬葉集大伴家持の歌、「すめろぎの御代榮えむとあづまなるみちのく山にくがね花さく。」
金華山　牡鹿半島の東南端海中にある島。
戸伊摩　宮城縣登米郡登米町。
三代　藤原清衡・基衡・秀衡。
一睡の中云々　盧生の故事。
秀衡　基衡の子。鎭守府將軍・陸奥守。文治三年（一八四七）歿。
金鷄山　もと中尊寺の傍にありしが、今存せず。

きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白髪かな　曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽敗空虛の叢となるべきを、四面新に圍みて、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、暫く千歳の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂

六　出羽に越ゆ

南部道遙かに見やりて岩手の里に泊る。小黑崎・みつの小島を過ぎて、鳴子の湯より尿前の關に掛りて出羽の國に越えむとす。此の道旅人稀なる處なれば、關守にあやしめられて漸くにして關を越す。大山をのぼりて日既に暮れければ、封人の家を見かけて

高館　平泉驛より北方約六町。衣川館ともいふ。
北上川　岩手縣岩手郡、北上山脈中に發し、南流して石卷灣に入る。
南部　盛岡市及びその附近一帶の稱。
衣川　岩手縣膽澤郡の西境に發し、東流して北上川に合流す。
泉が城　中尊寺の西北約十町。
國破れて云々　杜甫の春望の詩中に、「國破山河在。城春草木深。」
兼房　義經の臣增尾兼房高館落城の際に白髮を被りて奮戰して死す。
二堂　經堂と光堂。

宿りをもとむ。三日風雨荒れて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿するまくらもと

あるじの云ふ、これより出羽の國に大山を隔てゝ道定かならざれば、道しるべの人を賴みて越ゆべき由を申す。さらばと云ひて人を賴み侍れば、究竟の若者反脇差を横たへ、樫の杖を携へて我々が先に立ちて行く。けふこそ必ず危き目にもあふべき日なれと、からき思をなして後について行く。あるじの言に違はず、高山森森として一鳥聲きかず。木の下闇茂り合ひて、夜行くが如し。雲端に土ふる心地して、篠の中蹈分け蹈分け、水を渡り岩に躓いて、肌につめたき汗を流して最上の庄に出づ。かの案内せしをのこの云ふやう、「此の道必ず不用の事あり、恙なう送りまゐらせて仕合せしたり。」と、喜びてわかれぬ。後に聞きてさへ胸とどろくのみなり。

七　象潟

三將　前記の三代に同じ。
三尊　阿彌陀如來と左右の脇士。
七寶　金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・眞珠・玫瑰。
岩手の里　宮城縣玉造郡岩出山町。
小黑崎・みつの小島　同郡名生定村の附近。
なるこの湯　同郡鳴子町にある溫泉。
尿前の關　鳴子方面より山形縣へ越ゆる山中にありし關。
出羽　羽前・羽後の舊稱。
大山　鳴子より山形縣に越ゆる山。中山越といふ。

江山水陸の風光數をつくして、いま象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、砂を蹈みて、其の間十里、日影やや傾く頃、汐風眞砂を吹上げ、雨朦朧として鳥海の山隱る。闇中に摸索して雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色亦賴もしと、蜑の苫屋に膝を容れて、雨の霽るゝを待つ。

其の朝、天よく晴れて、朝日花やかにさし出づるほどに、象潟に舟を浮ぶ。まづ能因島に船を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかうの岸にあがれば、「花の上漕ぐ」と詠まれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。

寺を干滿珠寺といふ。此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其の影映りて江にあり。西はむや〳〵の關路をかぎり、東に堤を築きて、秋田に通ふ道はるかに海北に構へて、浪うち入るゝ處を汐越といふ。江の縱橫一里

封人　ホウジン。國境を守る番人。
最上の庄　山形縣最上郡新庄町。
不用の事　不都合なる事。
象潟　秋田縣由利郡。文化元年の地震にて湖底隆起して田野となれり。
酒田の湊　山形縣飽海郡。
雨も亦奇なり　晴雨ともに景色よきことを、「雨奇晴好。」といふ。
花の上漕ぐ　「きさがたの櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつり舟。」西行の歌なりといへども山家集には見えず。
干滿珠寺　象潟町にある曹洞宗の寺。

ばかり、おもかげ松島に通ひてまた異なり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲みを加へて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

八　北陸に入る

酒田のなごり日を重ねて、北陸道の雲に望み、遙々の思ひ胸を痛ましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の關を越ゆれば、越後の地に歩みを改めて、越中の國一振の關に到る。此の間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病起りて事を記さず。

荒海や佐渡に横たふ天の川

九　山中溫泉

山中の溫泉に行くほど、白根が嶽後に見なして歩む。左の山際に觀音堂あり。花山の法皇三十三所の順禮遂げさせ給ひて後、大

西施　支那越の女子の名。

ふる池や蛙飛こむ水の音　はせを

鼠の關　鼠は念珠とも書く。越後・出羽の境にありし關。

一振の關　市振とも書く。

暑濕の勞

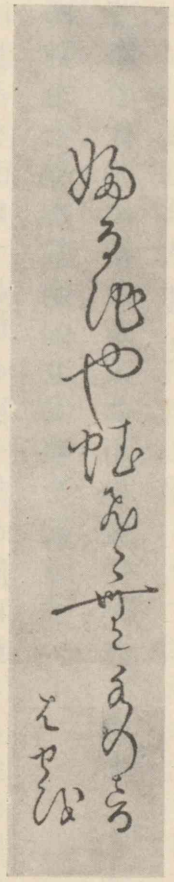
山中　石川縣江沼郡。

白根が嶽　白山。岐阜縣と石川縣との堺にあり。海拔二七〇二米。

三十三所　西國三十三所の觀世音なり。

那谷　石川縣江沼郡那谷村。

慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名付け給ひしとかや。那智・谷組の二字をわかち侍りしとぞ。奇石さまぐに、古松植ゑならべて、萱ぶきの小堂、岩の上に造りかけて殊勝の土地なり。



芭蕉筆

石山の石より白し秋の風

溫泉に浴す。其の効有馬につぐといふ。

山中や菊はたをらぬ湯の匂

あるじとするは久米之助とて、いまだ小童なり。かれが父俳諧を好み、洛の貞室、若輩の昔こゝに來りし頃、風雅に辱しめられて、洛に歸りて貞徳の門人となりて世に知らる。功名の後、此の一村判

有馬　兵庫縣有馬郡。古來有名なる溫泉。

久米之助　此の時、翁、桃妖といふ名を與へて門人とす。

父　泉屋又兵衞。

貞室　安原貞室。名は正章。俳人。松永貞德の高弟。延寶元年歿。年六十四。（一二七〇—一二三三）

貞德　朝廷より俳諧花の本の稱を許さる。承應二年歿。年八十三。（一二二三—一二三一）

判詞の料　俳諧の批評や添削などの謝禮。

長島　三重縣桑名郡長島村。

詞の料を請けずといふ。今更昔語とはなりぬ。

一〇　曾良と別る

曾良は腹を病みて、伊勢の國長島といふ處にゆかりあれば、先立ちて行くに、

行き〳〵てたふれ伏すとも萩の原　曾良

と書き置きたり。行く者の悲み、殘る者の恨み、隻鳧の別れて雲に迷ふが如し。予も亦、

けふよりや書付消さむ笠の露

大聖寺の城外全昌寺といふ寺にとまる。なほ加賀の地なり。曾良も前の夜此の寺にとまりて、

終宵秋風聞くやうらの山

と殘す。一夜のへだて、千里に同じ。われも秋風を聞きて、衆寮に臥せば、曙の空近う、讀經聲すむまゝに、鐘板鳴りて食堂に入る。け

大聖寺　石川縣江沼郡大聖寺町にあり。
全昌寺　大聖寺町南方にある禪宗の寺。
衆寮　禪宗の寺にて學問僧の居る坊。
鐘板　寺院などにて合圖のために鳴らす器具。
路通　忌部氏。僧にして芭蕉の門人。元文元年（二三九六）歿。
越人　本姓は越智十藏。芭蕉の門人。
如行　近藤氏。大垣藩士。芭蕉の門人。
前川氏　未詳。芭蕉の門人。
荆口父子　宮崎氏。大垣藩士。芭蕉の門人。

ふは越前の國へと、心倉卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙・硯をかゝへ、階のもとまで追ひきたる。折ふし庭中の柳散れば、

庭掃いて出づるや寺に散る柳

とりあへぬ樣して、草鞋ながら書捨てつ。

一一　大垣へ

路通も此の港まで出でむかへて、美濃の國へと伴なふ。駒に助けられて、大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より來りあひ、越人も馬を飛ばせて、如行が家に入り集る。前川氏、荆口父子、その外親しき人人、日夜とぶらひて、蘇生の者に會ふが如く、かつ悅び、かつ勞る。旅のものうさも、未だやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮をがまむと、また船に乘りて、

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

（松尾芭蕉―奥の細道）

蕪村　姓は谷口、後に與謝と改む。天明調の開拓者として名あり。天明三年歿。年六十八。（二三七六―二四四八）

九　天明調

蕪村

春の海ひねもすのたりのたりかな
折釘に烏帽子かけたり春の宿
羽蟻とぶや富士の裾野の小家より
菜の花や月は東に日は西に
牡丹散つてうち重なりぬ二三片
涼しさや鐘をはなるゝ鐘の聲
四五人に月落ちかゝる踊かな
化けさうな傘かす寺の時雨かな

太祇　炭氏。俳人。江戸の人。安永三年歿。年五十六。（二三七九―二四三四）

曉臺　加藤氏。俳人。名古屋の人。寛政四年歿。年六十一。（二三九二―二四五二）

楠の根をしづかに濡らす時雨かな　太祇

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

易水にねぶか流るゝ寒さかな

山路來て向ふ城下や凧の數

藪入の寝るや一人の親の側

橋落ちて人岸にあり夏の月

白雨や膳最中の大書院

犬にうつ石のさて無し冬の月

日暮れたり三井寺くだる春の人　曉臺

闌更　高桑氏。俳人。金澤の人。寛政十一年歿。年七十三。（二三八七―二四五九）

蓼太　大島氏。俳人。信州伊那の人。天明七年歿。年七十。（二三八八―二四四七）

几董　高井氏。俳人。寛政元年（二四四九）歿。年四十九。（二四〇一―二四四九）

梅早し蠣わる家の日なたむき　闌更

柳散るや少し夕べの日の弱り

川船やひばり鳴立つみぎひだり

白牡丹唯一輪の盛りかな　蓼太

枯葦の日に日に折れて流れけり

馬借りてかはるゞに霞みけり

鶯の二度來る日あり來ぬ日がち　几董

まさご路やかげろふを追ふ波頭

貫之が船の灯によるる千鳥かな

白雄　加舍氏。俳人。信州上田の人。寛政三年歿。年五十七。（二三九五―二四五一）

士朗　井上氏。俳人。名古屋の人。醫者。文化九年歿。年八十六。（二三八七―二四七二）

召波　黒柳氏。俳人。京都の人。明和八年（二四五一）歿。享年未詳。

夕しほや柳がくれに魚わかつ　白雄

たう〳〵と瀧のおち込む茂りかな　士朗

白壁に蜻蛉過ぐる日影かな

郊外に酒屋の倉や冬木立　召波

草分け

一〇　雀の生活

一　雀と人間

人間のゐる處には必ず雀がゐます。雀のゐる處には必ずまた人間はゐます。

殊に古くから人間の住ひしてゐる處には、必ず雀も古びてゐます。

雀　椿椿山筆

一つの里があれば、その里には必ず、人間にも草わけの一人の祖先があつた如く、雀にも草わけの雀といふものが必ず一羽あつた筈です。人間の血脈が古くなればなるほど、雀の血脈も古くなつて、相共にその親しさ

水入らず

の度も深くなるばかりです。でなくて、飽きも飽かれもせぬといふ、隔てのない水入らずの情愛が、さう續いて行けませうか。今は雀も人間も意識しないで、無心に眼と眼とを見合せてゐますが、いざとなると、何としても離れがたない懷かしさが胸を突きあげて來ます、雀にも人間にも。

雀ほど人間くさい小鳥はありますまい。無論靈的にです。雀の生活ほどまた、人間の生活に近しいものはありますまい。全く、雀くらゐ人間と深い交渉を持つた小鳥はありません。それは親しみ深いといふよりも、雀は人間なしには全く生きてゐられない、それほど雀は人間離れのしない小鳥なのです。

白壁が輝き、柿の實が赤く鈴なりになつた山裾の農家の景色などに、もつともふさはしいものは雀の聲です。さういふ時午後三時頃の白い雲が一つ、ふうはりとその上に浮んでゐないことはあ

佛龕 ブツガン。
六部衆 巡禮者。
放れ駒

りません。

その前の畦道を、高い佛龕を背負つた六部衆が通つたり、時とすると、秋晴の放れ駒が嘶き〳〵駈けて行つたりします。馬子が追つかけ追つかけ慌てくさつて、遠い稻田の向うへと曲つてゆくのも、雀の騷ぎで何といふことなしに平和な田園の風情が溫められて、遠くで吼ゆる野良牛の唸りまでが、如何にも長閑な小春のい、日を明るくします。

二　雀の沈默

羅漢柏 アスハヒノキ。

ある廢園の奥、深い林の中、その中は稍〻うち開けて、其處に腐れた青い古池がありました。その周圍の彼方此方に孟宗藪があり、孟宗藪の内外には、大きな楓がところ〴〵に紅葉して火のやうに燃立つてゐました。香氣の深い晩秋の一夕です。紅葉の蔭にはまた暗綠の羅漢柏などが散在して、明るい中に陰鬱な配調を作つて、

寂光土

更に木々の紅葉を一入明るく引立たせてゐました。そこに夕陽が射し込んだのです。金色の寂光土の莊嚴が、紅い楓を中心にして、澄みとほつた秋の大氣の中に深々と現出しました。寂び盡した孟宗の笹葉、暗い常磐木の葉、それらにもあまねく金色の光は細かに降りそゝいで、青い古池の面までも、かうぐ〳〵しい古金襴の一片のやうに耀かに染出したものでした。

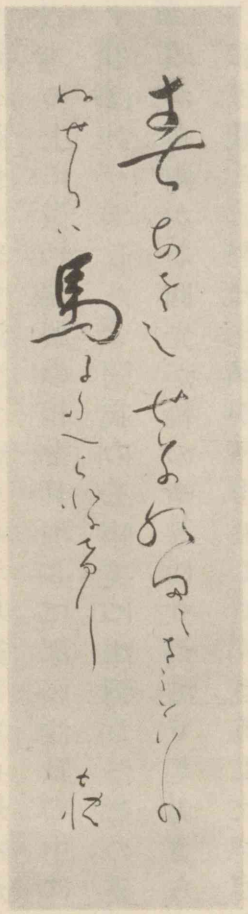
そのとき、あの紅葉の枝には一羽の雀が留つてゐました。聲も立てません。たゞ幽かに嘴を曲げて裏羽をかいつくろつてゐただけでした。その裏羽が金色に透いて、チラチラと日の光をふりこぼすのでした。また向き直つて幽かに圓い頭を動かすと、その頭からまた金色の光がチラチラとこぼれこぼれするのでした。

その時、また、とある細かな枯木の枝から、幽かに羽ばたきして、空を斜め上りに笹藪かけて飛んで行つた雀がありました。何とい

春あさみせとの水田のさみとりのねせりは馬にたへられにけり　白秋

ふ靜かな事です。その雀の飛んだ後の空には、一筋の金の光が暫くは斜め上りに曳きはへてゐました。

と、その飛び立つたあとの搖れのまだ止まぬ小枝へ、その幽かな搖るゝ光を慕つてか、引違へに飛んで來てまた留つた雀もありました。



北原白秋筆

ある雀は、笹の葉蔭のその金色の遠近を、幽かに羽音を立てゝ見え隱れしてゐました。

凡てが、しん〳〵としてゐました。その中で、また一番大きな楓のとある太い下の枝の、そのまた下枝の、一番紅い葉の天蓋のかげ

微妙端嚴

には、初めから深く默つて、たゞぢつと圓い頭を据ゑ、兩眼を据ゑ、膨れるだけ大きく膨れて、身動き一つしない、雀の中でも一番大きな雀が留つてゐました。寂びきつた金燻しの大きな雀、その雀はあまねく金色の光を浴びて、瞬もせず、身動きもせず、啼かず、飛ばず、ただ木の上に微妙端嚴の相を具現して、深い沈默の中に愈〻深く沈潛するばかりでした。閑寂の三昧境に味到したその姿。

頭から、幽かな圓光が輪のやうに立つてゞもゐさうな、その姿。

私は觀ると思はず頭が下りました。さうして思はず掌を合せました。

神格

雀に神格が無いとは誰が言へませう。雀も大自然の一微分子です、神聖な神の子です。

諸行無常

宇宙の萬物は皆うつりかはりてしばらくも常住せざる意。諸行は一切のもの。

三　雀の死

萬物は流轉する。永劫に流轉する。諸行は無常のやうではあるが、無常であるが故に常に流れてやまぬ光明の波を織り續けて行くのであります。大自然界のもろ〳〵の生命は、一に寂靜の中に色々に流轉はするが、何一つ消えも滅びもしないのです。然し午ら、現世に於て假に人間と生れ、雀と生れ、その他諸〻の種々相を現じて生れた者は、現世に於てまた一たびは必ず死する。私の愛する日本の茶色の雀達も、時が來れば息はとまり、その肉は腐れて、五蘊空に歸する、哀れと言ひませうか、不憫とも申しませうか。

五蘊空に歸す

雀は死にます。然し、雀はその醜い死の姿を誰一人にも見せません。それは不慮の禍で死ぬか、殺されるかでないかぎり、雀の自然死は極めて自然です。さうして清淨です。靜寂です。恭謙な、而して素樸で潔癖な雀は、曾てその巢の中で死體を曝しません。

眷屬

ケンゾク。親族に同じ。

眷屬の前にも腐れてゆく自分の肉のにほひを恥づるのゝです。

老衰して、または病み果てゝ愈〻其の壽命の盡きる日が近づいた

と知ると、雀はたゞ獨りその巣を棄て、その家内眷屬同類を棄て、ただ獨り、蒼空の圓天井を次第に見棄てゝ行方知れずに飛んで行きます。落行く先は日の目もさゝぬ山窪か陰深い林か、谷底の枯草原か。さういふ淋しい、誰の眼にもつかぬ所へ行つて死んで了ひます。

落葉がその上にふりたまつて來ます。風がはら〳〵と吹いて來ます。落葉はまた一しきり降つて來ます。さうしてその雀の上で、落葉は落葉と重なります。さうして時をりかさりと音を立てます。雨が蕭々と降つて來ます。落葉も蕭々と音を立てます。露が置き、果ては野山に白い綿雪さへ降りそゝいで來ます。落葉は腐ります。雀は腐ります。さうして雪がその上に白い柩布をかけて了ひます。何といふ清淨な神祕な死です、雀の死は。

（北原白秋―雀の生活）

蕭々　風の吹く聲。

一一　雅文三題

一　蓮の花をめづる

おほよそ人の世の中、おのがじしなりはひいとなきものから、なほそのいとまにて何くれの心やりぐさのなくてやはあらむ。さるは畫かき手習ふわざをはじめにて、小琴を遊び圍碁にともなふたぐひをこそ、いにしへ人も心ゆくものには言ひ置きつれ。しかはあれど、おのがをぢなき心に思ひたゆめられて、さる類の事はおのづからに物憂く、たゞいとまある折々は、世離れたる境に心を寄する癖なむ絶えざりける。かれ幼くて市の中に生ひ立ちし程より、いかで塵ひぢの跡絶えたるすさびせばやと思ひ渡れど、さるよすがもあらで、春秋を送り迎へぬるに、二十年といふ齡まだ二つ許り足らぬ程にやありけむ、よしありて此の上野の岡のかたへなる

かれ　故にの古語。

かやの町と云ふ家に住み移りぬ。所のさまおのづから山里びて、茅が軒、蓬の門、すべてひたゝけるあたりとはやうかはりて心ゆく方ぞ多かる。山のたゝずまひ水のありさま、春秋につけつゝあはれたえせぬが中に、わきて蓮花咲くころこそこよなく見所は多かれ。波清き池の心いとひろらかに、花に葉にいづこをはかともなく、目ぢの限りにほひみち、あしたには露ながらゑまひひらけて、さしのぼる日影を待ちとり、夕べには雨の名殘しづまりて、暮るゝ浪間にねぶれるなど、花物言はまほしげなりと云へるから歌の心ばへさへ思ひ出でられて、この世の物としも覺え

蓮　岡本蕉雨筆

かやの町　池の端茅町。

ひたゝく　締りなく、ばつとしたるさま。

はか　限り。

花物言はまほし　和漢朗詠集に、「誰謂花不レ語。輕漾激分影動レ脣。」

ずなむ。かゝるながめに朝夕なづさひては、いとゞかの市のちまたの厭はしさも覺えて、かく所得しすみかの世にさちある事をぞ喜ぶなる。さるは、

ちりの世はよそにぞすまむ池水のにごりにそまぬ花になれつゝ

（清水濱臣―泊酒舍文集）

二　砧

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。かりがねの聲の砧をさそふにやあらむ、砧の音の雁がねに通ふにやあらむ。あなあやし、あなあやし。そもこの音の悲しきか、住む里の寂しきか、打つをりのうきがゆゑか。皆あらず、聞く人の心の寂しきなり。

（清水濱臣―泊酒舍文集）

なづさふ　なじむ。

清水濱臣　國學者。泊酒舍と號す。江戸の人。文政七年歿。年四十九。（二四三六―二四八四）

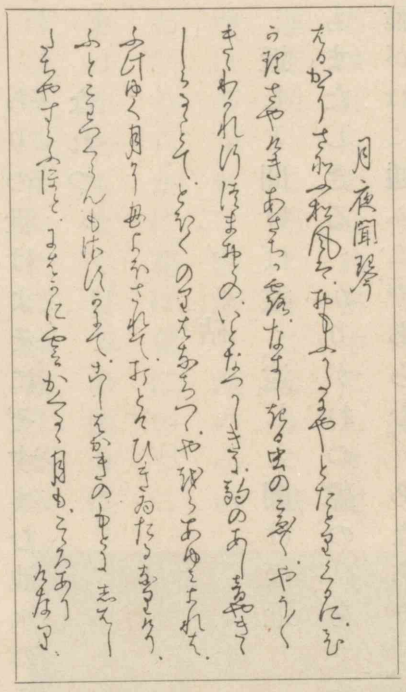
しきる　續き至る意。

たゆむ

そやの鐘
月夜聞レ琴ヲ
はるかにさそふ
松風は、おもふ
かたにやとたと
りくるに、ひか
りさやけきあさ
ちか露、なきし
きる虫のこゑ
こゑやう〳〵き
きわかれ行つま
おとの、いとな
つかしきに、駒
のあし音やき〻
しらるゝとて、
とほくのりはな
ちつゝやをらあ
ゆみよれば、ふ
けゆく月にもよ
ほされて、打と
けひきゐたるな
りけり。ふとこ
わつくらんもさ
すかにて、こし
はかきのもとに
しはしたちやす
らふほと、には
かに雲かくるゝ
月も、こゝろあ
りけなり。
さうし

三　夜學

寺々のそやの鐘の響もをさまりて、皆人も寢たるに、いと嬉しう、燈火あかくしなして、文机に打向ひたる、いみじう心澄みて、晝見たりしあたりの何心なくて過ぎにしも思ひ知られて、深き心ばへあるくだり〳〵もおのづから解きえらるかし。かゝげつくしてもなほねぶたさも知らず、油さし添へつゝ見もて行くに、遠き世の人もたゞさし向ひ語らふ心地す。さうし作りて、をかしきふし〴〵あるはふと思ひえたる事などをば、墨押しすりつゝ書きつけなどするもをかし。



樞園文集

あだごと
いたづらごと。
中島廣足
國學者。樞園と號す。肥後（熊本縣）の人。文久四年歿。年七十三。（一二四五三―一二五二五）

鳥の聲は夜深きにやと思ふに、いととくあけはなれたる、しばしとて打ちねぶる夢のうちもあだごとならむやは。

（中島廣足―樞園文集）

蓮は清きもの、泥より出でたり。栴檀は香（かうば）しき物、大地より生ひたり。櫻はおもしろき物、禾の中よりさき出づ。禍は口より出でて身を破る。福は心より出でて我をかざる。今、正月の始めに、法華經を供養しまゐらせむとおぼしめす御心は、木より花の咲き、池より蓮のつぼみ、雪山の栴檀のひらけ、月の始めて出づるなるべし。

法華經を信ずる人は、さいはひを萬里の外よりあつむべし。法華經を信ずる人は、栴檀に香しさのそなはりたるがごとし。

（日蓮―十字御書）

玉かつま　十五卷。本居宣長の隨筆。

さだめ

こよなく

桐がやつ　櫻の種類中第一といはる。花は薄色、多くは八重。もと鎌倉の桐が谷より出でしよりいふ。

八重一重　桐がやつの別名。一枝に八重と一重とまじりて咲くよりいふ。

にほふ　はなやかに艶麗なること。

一二　玉かつま抄

一　花のさだめ

花はさくら。櫻は山櫻の、葉あかくてりてほそきがまばらにまじりて、花しげく咲きたるは、又たぐふべき物もなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山ざくらといふ中にも、しなじなのありて、こまかに見れば、一木ごとにいさゝかはれるところありて、またく同じきはなきやうなり。又今の世に桐がやつ・八重一重などいふも、やうかはりていとめでたし。すべてくもれる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず。松も何もあをやかにしげりたるこなたに咲けるは、色はえてことに見ゆ。空きよくはれたる日、日影のさすかたより見たるは、にほひこよなくて、おなじ花ともおぼえぬまでなむ。

むげに

ねびれしぼむ

ありて世の中云云　古今集、詠人知らずの歌に「殘りなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はてのうければ。」とあるによる。

ひなぶ

朝日はさらなり、夕ばえも。

梅は紅梅。ひらけさしたるほどぞ、いとめでたきを、さかりになるまゝに、やう〳〵しらけゆきて、見どころなくなるこそ、いとくちをしけれ。さくらの咲けるころまでも、ちることしらで、むげにほひなく、ねびれしぼみてのこりたるを見れば、げに「ありて世の中」は、何事もみなかくこそと、見る春ごとに思ひしらるかし。白きはすべて香こそあれ、見るめはしなおくれたり。大かた梅の花は、ちひさき枝を物にさしてちかく見たるぞ、梢ながらよりはまされる。

桃の花は、あまた咲きつゞきたるを、遠く見たるはよし。ちかくてはひなびたり。山ぶき・かきつばた・なでしこ・萩・すゝき・女郎花など、とり〳〵にめでたし。菊もよきほどにつくろひたるこそよけれ、あまりうるはしくしたゝかにつくりなしたるは、中々にしなく、なつかしからず。躑躅、野山に多く咲きたるは、めさむるこゝち

いまやう
ふるき物　古書。
心のなし　氣のせい。
ひがごころ
人げ　人のけはひ。
世ばなれたるところ　世間ばなれのしたる處。世間から遠く隔りし處。
心もしをる　氣力がひきたゝなくなる。

す。海棠といふ物、からめきて、こまやかにうるはしき花なり。

そも〳〵かくいふは、皆おのが思ふ心にこそあれ。人は又思ふこゝろことなるべければ、ひとやうにさだむべき業にはあらず。又いまやうのよの人のもてはやすめる花どもゝよにおほかるを、數へいでぬはことさらめきたるやうなれど、歌にもよみたらず、ふるき物にも見えたることなきは、心のなしにや、なつかしからずおぼゆかし。されどそれはたひとやうなるひがごころにやあらむ。

二　靜かなる山林を住みよしといふ事

世々の物しり人、又今の世に學問する人なども、皆すみかは、里遠く靜かなる山林を住みよく、このましくするさまにのみいふなるを、われはいかなるにか、さらにさはおぼえず。たゞ人げしげく、にぎはゝしきところの好ましくて、さる世ばなれたるところなどは、さびしくて、心もしをるゝやうにぞおぼゆる。さるは、まれ〳〵にものして、一夜旅寢したるなどこそは、めづらかなる方に、をかしくも覺ゆれ。さる處につねにすまゝほしくは、さらにおぼえずなむ。

俗情　俗つぽい心。
まがつひの神　凶事を掌るといふ神。八十禍津日神・大禍津日神の併稱。

人の心はさま〴〵なれば、人うとくしづかならむところを、すみよくおぼえむもさることにて、まことにさ思はむ人も世には多かりぬべけれど、又例のつくりごとの漢ぶりの人まねにさいひなして、なべての世の人の心とことなるさまにもてなすたぐひも、中にはありぬべくや。かく疑はるゝも、おのが俗情（さびごころ）のならひにこそ。

三　道

神の道は、世にすぐれたるまことの道なり。みな人しらではかなはぬ皇國の道なるに、わづかに絲筋ばかり世にのこりて、たゞまことならぬ他の國々の道のみはびこりにはびこれるは、いかなることにか。まがつひの神の御こゝろは、すべなき物なりけり。

（本居宣長―玉かつま）

一三　秋の讃美

法悅
たゝずまひ
縹渺

爾等、秋の自然を讃め稱へよ。

天には藍光あり。地には堅信あり。人には法悅あり。朗かに澄み渡れる碧空、劃然と天半に浮び出づる遠山のたゝずまひ、野末を遠くさすらひゆく微風のさゝやき。高く聳ゆる梢には白雲一片心無くして漂ひ、清明なる深淵には數知れぬ鱗魚（うろくず）潑剌として游泳す。秋の自然は幽玄なる神祕の世界を展開し來る。

無邊無際の彼方に亙る大いなる空間よ。無始より起りて無終に連續する悠久なる時間よ。そは彼の月の光の物靜かに輝くところ、彼の縹渺たる銀河のゆくへも知らず流れ流るゝところ、そこに太初以來の謎を祕めて永久に仲秋の空に不可思議なる景象を顯示する。

幽邃
イウスヰ。

頃
面積百歩をいふ。

橘
へんるうだ科に屬する小喬木。

閑寂、玄妙、幽邃、秋は冥想の相（すがた）である。さらば跪いて秋の自然に、敬虔なる禮拜の至情を擎げよ。

爾等、秋の人生を讃め稱へよ。

秋は成熟の姿である。野に出でて見よ。野には、萬頃の稲田に、黃金の浪が搖られるではないか。畠に往きて見よ。山に往きて見よ。愛すべき蔬菜の如何に肥え太りたることよ。柿の實は赤く、橘の實は黃ばみ、木々の梢は枝もたわゝに笑み交すではないか。

收穫　淺井忠筆

勞作は酬いられた。滿足は齎された。泣いて蒔いた農夫は、今や悅んで收穫（ごりい）れつゝある。豈、啻に農夫のみならんや。凡そ勤勞

なきところに收穫なし。彼の山の峽より薪を負ひて下る杣人を見ずや。また彼の溪流に棹さして流れゆく筏の運命を見ずや。孰れか勤勞によりて贏ち得たる報酬にあらざるものぞ。薪の上、一輪の野菊あり。筏に挾める一枝の紅葉は、深碧の水に照映する。人事の美しさは、畢竟勤勞の裡より生ずる。

さらばまた跪いて、成熟せる秋の人生に滿腔の歎賞を擎げよかし。

秋は現實に充足せる象である。

自然は、秋に至つて生々發育の歩みを止め、人生の勞作も亦、秋に至つて、その報酬を收める。茲に大いなる現實の充足が存する。

併しながら、秋の喜ばしさは春の喜ばしさではない。春には希望があつた。瑞々しい若さがあつた。一向精進の純潔なる勇氣

峽　カヒ。
孰れか　イヅれか。
擎ぐ　ササぐ。
精進　シャウジン。

があつた。秋に至つて希望は充足せられ、瑞々しさは衰へ、精神の歩みは自ら停滯する。春は動きつゝあつた。秋は靜かである。物のあはれはこの裡より生ずる。

寂しいかな、秋の色や。夕映の雲、千切れ〳〵に褪せゆきて、喘ぐが如き木枯の消えゆくところ、海原遠く悲しき聲す。脚下の巖角に打寄する浪のしぶきにたち迷へる、美しき幻影のゆくへやいづこ。蒼茫として暮れかゝる現實の姿の果敢なさよ。秋の悲哀は畢竟、この現實の充足の裡より生ずる。

滿たされたる悲み！　現實の充足は、束の間の悅びにして、茲に超現實に對する深刻なる憧憬を生ずる。如何に人類生存の根柢を撼かしつゝ涌出づる力强き憧憬よ。是に於て秋の形象は、一指空明のあなたを指して、衰へゆく色界の萬象より、一味の悟道を求

一指空明　色界　シキカイ。梵語 Rupadhatu の譯。欲界の上にある世界。貪欲薄きもなほ色（物質）に染る境界。この上に無色界あり。總稱して三界といひ、衆生の轉生輪廻する世界。

意識

神韻縹渺

中村孝也　文學博士。國史學者。東京帝國大學史料編纂官兼助教授。群馬縣の人。明治十八年生。

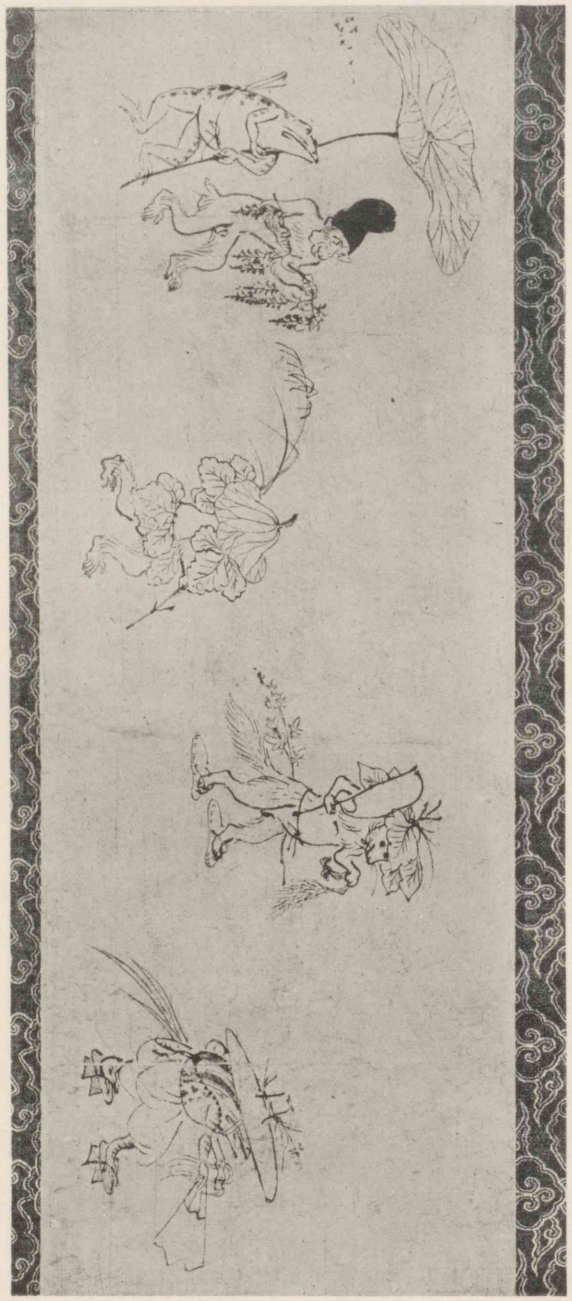
めんとする風趣を藏するに至る。此處に悲哀あり、彼處に新なる生命あり、現實と超現實とは、最も鮮かに人の意識に對比せられて來る。

營々たる人生勞作の背後には、神韻縹渺たる冥想の國土がある。そこは哲學と、藝術と、詩と、宗教と、而して實に尊き祈禱の國土である。

嗚呼、秋を讃め稱へよ。天の藍光は悠久なる生命の表象である。堅信は現實の悲哀を超脱する一路である。さらば限りなき法悅は、爾の生存を擧げて大歡喜の潮に浸すことであらう。庶幾くは、その成熟の姿に、刹那の享樂を求むること勿れ。

野末を越えて夕べの鐘は浪だちつゝ來る。農夫は跪いて合掌する。あらず、總ての人、悉く跪いて合掌せよ。そは實に秋を讃美する尊き祈禱なるが故に。

（中村孝也の文による）



畫戲獸鳥　筆正僧羽鳥

十訓抄
鎌倉中期に教訓的説話を十目に分類して集めたるもの。作者未詳。

繪佛師
佛像をゑがく繪師。

良秀
傳未詳。

知音
チイン。チオン。琴の音を知る意より轉じて己の心を知る親しき友人。

一四　十訓抄

一　よぢり不動

繪佛師良秀といふ僧ありけり。家の隣より火出で來て、おしおほひければ、大路へ出でにけり。人のかゝする佛もおはしけり。また物も打ちかづかず。妻子などもさながらありけり。それをもしらず、身ばかり、たゞ一人出でたるを事にして、向ひのつらに立てりけり。火はや我が家にうつりて、煙・焰くゆりけるを見て、大方さりげなげにてながめければ、知音どもとぶらひけれども、少しもさわがざりけり。いかにと見れば、むかひに立ちて、家の燒くるを見て、打ちうなづき〳〵して、時々笑ひて、「あはれ、しつる所得かな。年頃はわろく書ける物かな。」といふときに、とぶらひに來れる者ども、「こはいかに、かくては淺ましき事かな。物のつき給へるか。」とい

わたう　汝等。

御堂關白　藤原道長。

堪能　四條大納言　藤原公任をさす

へば、「なでふ物のつくべきぞ。年比不動尊の火焰を、あしう書けるなり。はや見取りたり。これこそは所得よ。この道をたてゝ世にあらむには、佛をだに好く書きたてまつらば、百千の家も出で來なむずるものを、わたうこそさせる能もおはせねば、物をも惜しみ給へ。」といひて、あざ笑ひて立てりけり。そののちにや、良秀がよぢり不動とて、人々めであへりけり。

二　三　舟の才

御堂關白、大井川にて遊覽の時、詩歌の舟を分ちて、各〻堪能の人々をのせられけるに、四條大納言に仰せられていはく、「いづれの舟にのらるべきや。」公任卿いはく、「和歌の舟にのるべし。」とてのられけり。さてよめる、

朝まだきあらしの山のさむければ紅葉のにしききぬ人ぞなき

わかせこにみせんとおもひしむめのはなみれともみえすゆきのふれゝは　赤人

かをとめてたれをらさらむむめのはなあやなしかすみたちなかくしそ　躬恒

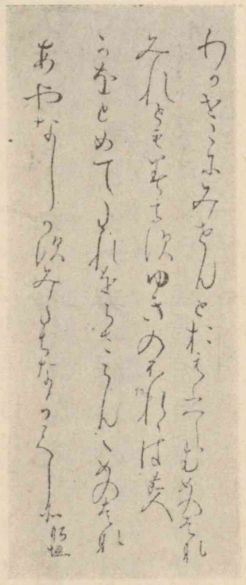
能因入道　俗名橘永愷。世に古曾部入道といふ。白河天皇御宇前後の人。

伊豫守實綱　日野三位資成の子。

三島　三島の宮。愛媛縣越智郡にあり。

天の川の歌　金葉集に出づ。

後にいはれけるは、「いづれの舟にのるべきぞと仰せられしこそ、心おごりせられしか。又詩の舟に乘りて、これほどの詩をつくりたらましかば、名をあげてまし。」と後悔せられけり。



藤原公任筆

三　能因法師

能因入道、伊豫守實綱に伴なひて、彼の國にくだりけるに、夏の初め日ひさしくてりて、民の歎あさからざりけるに、神は和歌にめで給ふものなり、こゝろみによみて、三島に奉るべき由を、國司しきりにすゝめければ、

あまの川苗代水にせきくだせあまくだりますかみならば

神

みてぐら　御手座の意にして、幣なり。

貞觀のみかど云云　唐の太宗、蝗蟲の百姓を害するを傷み、蝗數匹を呑み、災を己の身に移せしといふ故事。貞觀政要に出づ。

みやこをばの歌　後拾遺集に出づ。

みちのく　陸奥。今の東北地方をいふ。

とよみて、みてぐらに書きて、社司して申上げさせたりければ炎旱の天、にはかにくもりわたりて、大きなる雨降りて、枯れたる稻葉、おしなべてみどりにかへりけり。忽ちに天災をやはらぐる事、唐の貞觀のみかどの、蝗をのめりし政にもおとらざりけり。能因は至れるすきものなり。

みやこをばかすみとともに立ちしかど秋かぜぞふく白河の關

とよめりけるを、都にありながら、此の歌を出ださむ、無念と思ひて、人にもしられず、ひさしくこもりゐて、色をくろく日にあぶりなして後、みちのくの方へ、修行のついでによみたりとぞ披露しける。

（十訓抄）

フローベル Gustave Flaubert　フランスの小説家。（一八二一―一八八〇）

一波一瀾の起伏

千態萬樣

一五　人生の熱愛者

フローベルは、藝術家は藝術の爲には人生をも犧牲にしてしまはねばならぬといふ樣な事をいつたさうである。これは飽く迄も人生の冷酷なる觀察者たらんとしたといふ、彼の痛ましい程の覺悟を表した詞と思はれる。フローベルの一生が、どういふ一生であつたかは、委しく知らない。併し自分が今こゝで感じたことは、この冷やかに人生の傍觀者たらんとする態度は、どうしても、飽くまで人生を深く經驗しようとする態度と衝突せざるを得ないといふことである。その上に自分は、人生の傍觀者としての所謂冷酷なる觀察の價値に就いても疑がある。實生活の渦卷の中に捲きこまれない樣にして、しかも其の一波一瀾の起伏をも見逃すまじと冷酷に見張られた眼には、人生はさながらに其の千態萬樣

を映じさうに思へる。

しかしながら一擧手一投足にも、藝術家的觀察の心掛を弛めない人が、果して眞によく人生の情趣に味到することが出來るであらうか。固よりフローベルの樣な天才の觀察は、その官能の鋭敏、その頭腦の明快、その凡てを拔いたあらゆる能力によつて、普通の人間が片手間でなく一所懸命に、感激したり、懊惱したり、歡喜したりする心裡の內奧の微妙にまでも、想到することが出來るであらう。

しかし自分には、どうしても、一方に於て觀察者たらんとする努力が、眞劍な生活の障礙（シャウガイ。）にならぬものとは思へない。隨つてこの點から見て、たとひ如何ばかり精緻を極めた觀察にしても、尙一膜を隔てゝ內奧の消息に徹し得ぬ缺點は、免れ得ぬであらうと思ふ。自分はどうしても、純藝術家の態度に飽足らない。又藝術家に人

間としての豐富な眞劍な經驗がなければ、その文學はどうしても一味の偉大や深遠を缺かざるを得ぬと思ふ。固よりフローベルに人生の經驗がないと言ふのではない。自分はそんなことに立入つて彼此いへる程、フローベルを知つてゐる者でも何でもない。こゝでは大まかにその態度について言ふのである。

自分は思ふ。藝術家たることは絕對的に必要な事ではない、先づ人たるを要する。藝術家は人生の描寫者たる前に、先づ人生の經驗者であらねばならぬといふことは、動かすべからざる眞理ではあるまいか。山に入る者は山を見ずといふけれども、ゐながらに遠望するものは、山に入る者よりも山を知らぬ者である。山の姿を知つても山の眞實を知らぬ者である。人生を觀察する所の眼は、藝術家にとつて固より缺く可からざるものである。しかし偏に藝術家的態度に急ならんとするの弊は、どうしてもその人を

零細

陋とする

陳い

して人生の皮相を觀察して、人生を知り得たりとなし、人生の外部的現象を追ふことが徒に細かになつて、その內的意味を逸するといふ樣な弊に陷らしめ易いと思ふ。客觀的に靜觀するのはよい、しかし先づ主觀的な豐富な經驗が欲しい。坂を登り溪を涉り嶺を極めて、又野に下つて山を見る人は、眞に山を知る人であらうと思ふ。自分は今の文藝作家達が零細な經驗をやつては、直ぐ又御手輕に冷酷なる觀照者になりすまして居る淺薄を陋とする。

如何にして人生を知るべきか。自分はこゝに至つて、久しく世に忘れられて口にする人もなかつた「愛するは解するなり。」と、いふ陳い詞の新しい意味を發揮して來ることを認めずには居られぬ。人生を熱愛する人でなければ、人生の深い大きな意味にまで潛り入ることは出來ない。愛する者のみ深入りすることが出來る。自分達は、人生の熱愛者によつて與へられた文學を渴望する。そ

呪詛　ジュソ。

妥當

ヒユマニティー　Humanity

れが或は憎惡・痛罵・呪詛の聲によつて現れて來ても、或は又一波浪の起伏もない冷靜の姿で出て來ても、その底には何處とも知れぬ、この熱愛の潮の遠鳴りする樣な文學が欲しい。

今の或人は、人生に對して永遠の懷疑に居るなどと言ひながら、その實餘り早く人生を見きはめ過ぎたのではあるまいか。彼等は人生の現實の醜惡の相を憚らず見得たといふ事に自負して、更に人生の探究を進めることを止めた。彼等は空想の排斥せざるべからざるを呼號して、彼等の所謂現實の經驗なるものに行詰つた。彼等の苦笑には悲痛よりも寧ろ得意がある。要するに彼等の人生に對する愛は極めて淺かつた。

人生を愛するといふ詞は妥當ではないか知らぬが、意味は大抵察してもらへることゝ思ふ。人生を愛する人の文學は、卽ちヒユマニティーの文學であらう。しかし自分はヒユマニティーの文

學といふことを、唯單に義理人情といふ意味にのみは解釋したくない。我が國でいふ義理人情といふ詞だけでは、內容の大きさや深さが足らぬ。忠義といひ孝行といひ貞節といふ類の、唯社會的、家族的の道德よりも、又人道といひ博愛といふ所謂世界的道德よりも、內的生命の愛重といふことは、ヒユマニティーの根本義であらうと思ふ。個性の泉を深く自由に掘つた消息を傳へる文學のみが、我等の如き力に乏しき者に力を與へ、我等の萎靡した內生活を振興せしめる文學である。

自分は嘗て老子の「大道廢れて仁義あり。」といふ言葉を讀んで、何となしに涙を催したことがあつた。そして何處やらにヒユマニティーの聲をきく樣に感じた。トルストイやツルゲーネフの小說には、その動かされる性質は違つても兎に角動かされる。そして此等の作家からは、何はともあれ、人生に對する愛の響を聽取し

萎靡　キビ。

大道廢れて云々　老子に、「大道廢レテ有リ仁義。智慧出デテ有リ大僞。」とあり。

トルストイ　Lev Nikolaievitch Tolstoi　ロシアの小說家。（一八二八—一九一〇）

ツルゲーネフ　Iran Sergeievitch Turgeney　ロシアの小說家。（一八一八—一八八三）

得る樣に思ふ。

今の小說は、一體に皆上手になつたけれども、併し出て來るものも出て來るものも大方一樣になつて來た。兎に角、當座の所は行詰りの姿である。これは自然の狀勢でもあらう。徒に天才出でよと呼號しても、天才はそんなに急に出るものではない。併し若しこの時に新なる泉に掬する人があるならば、その人こそは人生を愛する人であらう、人生のたどりを深くすることを止めぬ人であらう。かくの如き人のみが獨り新なる天地を拓き得る。それは內より我等を動かし得べき人である。文藝上の新局面は唯描寫の態度から開かれ得るものではない。人生に對する根本的態度から導き出されねばならぬ。若しそれ人生を愛するといふことが、徒な人生の謳歌といふ意味でないことは、今更絮說する必要もあるまい。

（安倍能成の文による）

掬す

人生の謳歌

絮說　ジョセツ。

安倍能成　京城帝國大學教授。愛媛縣の人。明治十六年生。

文治それの年　文治二年。（一八四六）
鎌倉の大將殿　頼朝をさす。
御前追ひ　ミサキオひ。
けいめい　警衛の意。
かへりまをし　御禮參り。
忌垣　イガキ。神社の周圍に廻らせる垣。
かたゐもの　乞食。

一六　銀の　猫

文治それの年の秋、八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例のことにて、御供つかうまつる人々、御前追ひ、御あとべつかうまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴の歩みして、疾からず、遲からず、つらを亂さず練出でさせ給へるを、大路に膝折り伏せ、かしこみ奉る人數多あるに、けいめいして「あな」とだにいはせず、よにいかめしく貴き御有樣なり。かへりまをしして御手輿に召させ給ふほど、さとき御まなじりに見とゞめさせ給ひ、御階の忌垣のもとに畏まりをる法師のあなるが、見上げ奉るつらつき、旅に飢ゑて、いとやせ黑みづきたるに、衣杖笠などもかたゐものゝさましたるが、目を偷みてうづくまりをる、なほ人ならず思しけむ、「あの法師が修行するやう、名をもとへ。」と仰せたうぶ。御輿添ひの若侍、いそぎ走りより

ゆくりなき　雲水
圓位　西行の法名。
穴熊の云云　史記に、「西伯將レ獵。トレ之。曰ク、非レ龍、非レ彪、非レ熊、非レ羆、非レ貔、非レ虎、所レ獲霸王之輔。果遇レ呂尚於渭水之陽。」とあるによる。
藐姑射の山　仙洞御所をいふ。
月花のなげき　東人　アヅマビト。
八百日ゆく云々　非常に歌數の多きをいふ。

て、「有難く御目たまへり。何處よりの修行ぞ。名をも申せよ。」といふ。ゆくりなきに驚きたるさまして、「雲水にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申す。」といふ。聞し召されて、「さればこそ聞き知りたれ。穴熊のたけき獲物の類ならで、賢き人得たるためしに、誘ひかへらむ。わがあとにつきて來れといへ。」とて、召し連れさせ給へり。

御館に入らせ御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶらあまた照らしかゝげたり。「けふの道ゆきづとゐてこ。」と仰せたうぶ。「法師まゐれ。」とて、おまし近き處の一間なる簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、「昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ししみて、身は黑くやつしたれど、月花のなげきの譽れは、物の心なき東人さへ聞き知りたるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には、玉とて拾ひ收めたらむを、語りて聞かせよ。」と仰せたうぶ。

伊勢の海云々
大和物語、藤原敦忠の歌に、「伊勢の海千尋の濱に拾ふとも今はかひなくおもほゆるかな。」とあるによる。

いみじく畏まりて、「思ひかけず大木の御蔭に參り侍れば、いともかがやかしきにぞ、たゞ夢路をたどるやうに侍りて、聞え奉るべき事も侍らず。さとき御眼に見現されて侍るこそ、いとも有難けれ。伊勢の海千尋の濱におり立ちならひ侍れど、かひある事も打ち出で侍らぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にもかねて學ばせ給ふとも漏れ聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御うつはものの大いなるに思し寄らせ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍り。大空に羽打ちつけて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あな畏し。」と申す。うち笑ませ給ひ、「弓取る人のもとの心の猛きには、詠む歌も直くあからさまと聞くはまことか。歌は武士の物々しき心には詠み移すまじきものに、宮人たちは沙汰し給へりとや。軍に出で立ちて、笛鼓の音、馬の嘶は物とも思はぬを、このみそ文字餘りのまなびには心の

ますらを心
なよびか
なよ〳〵せるさま。

大風起り云々
漢高祖の大風歌に、「大風起リ兮雲飛揚。威加ニ海内ニ兮歸ニ故郷ニ。安得ミ猛士ヲ兮守ニ四方ニ。」とあるによる。

烏鵲南に云々
魏の曹操の短歌行に、「月明星稀、烏鵲南ニ飛ブ。」とあるによる。

槊
ほこ。

染殿
布帛を染むることを掌る役所。

おくるゝはいかに。」「こは畏き御心にもおぼし惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢とらして、御軍に立たせ給ひき。その御歌をよみ奉れば、猛く直々しく、調べもいと高しとこそ打ち聞き侍れ。いでや歌詠まむとては、ますらを心をとり『隱し、あてになよびかにのみ詠みうつすべくするこそ、この道のいみじき煩ひなれ。君がさとく猛き御心のまゝにうちまねばせ給はむには、今の世の人たれかは竝びあへ奉らむ。三尺の劍を執りて、『大風起り雲飛揚す。』と歌ひ、槊を横へて、『烏鵲南に。』と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじきをすり磨きたるも、染殿のやしほの色も、はかなき目う

上田秋成

つりばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒のあゆみ、何れの道何れの業にも、始めよりすぐれたらむは鬼にこそ侍らめ。」といふ。「人々、あれ聞きたまへ。世は捨て遁れても、頼もしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓矢の上手となむ聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひしみぬることは忘れずてこそあらめ。一言にても承るべし。」「こは益〻恐れある御問はせなり。御物語のはてぐ〳〵は、つはものゝ道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの痩法師にだに物問はせ給ふことのかたじけなさよ。向ひ奉りては、をこがましく家の傳なりなど聞え奉るべくも覺え侍らず。ましてありがたき大宮仕をいなみ奉り、親たちのいつくしみをさへあだなるものに思ひなして、年僅かに二十三にて家を出でたるいたづらものゝ、弦ひき一つだに心に留めしことも侍らず。たゞ一言の忘

秀郷　藤原氏。田原藤太と稱す。天慶の亂に平將門を誅して功あり。歿年未詳。

れがたきは、『賞を重くし、罰を輕くせよ。』といひしと、『任ずる者を辱しむれば危し。』といひしありがたさよ。士卒の疽を病めるを吮ひしは人の心をよく買ひなすと雖も、眞の情よりとも覺え侍らず。寵を減じて人を危きに陷るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下をしるべき君の御心にあらず。軍を出し給へることの、あやしきまでかしこくましませるを、餘所ながら聞き奉るには、この御問ひゆるさせ給へ。」と、額を板敷に摺りつけて申す。

君笑み誇らせ給ひ、「口とく心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今ははたしてむ。人々と土器とりはやし、曉かけて遊ばむ。まれ人は酒飲まざるべし。鹿猿のなかに立交りて歌詠めといふとも詠むまじ。たゞわが前にて遊べ。風冷やかなるにも、飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は煖かにもこそ。この火取、法師に參らせよ。」とて、白銀もてつくりたる、猫のかたちしたるを

士卒の疽を云々　史記吳起傳に、「卒有ニ病レ疽者一起爲吮レ之。」とあるによる。

寵を減ず　齊の孫臏の故事。

取り傳へて、「君より賜はる。」とて、前に置きたり。「鹿・猿はなほ心猛し。鼠をだに捕らぬ痩法師が爲には、似つかはしき御賜ぞ。」とて三度押戴きぬ。

あした御暇賜はりて立出づるに、御館の人宿りに、たれ殿の童ならむ、くゝり袴の裾、朝露に濡れそぼちて、いと寒げにをるを見て、「これ取らせむ。火埋みて手足煖めよ。」とて、かのきら〳〵しき物を與へて、顧みもせず立去りぬ。童うち驚き、「これ見たまへ、見も知らぬ法師の、見も知らぬもの賜ひつるは。」とて、靑侍に見すれば、目口をはだけ、「かく尊き寶物を誰かは得させむ。拾ひやしつる。」といふ。「さらにさらに、道のそらにかゝるものやはあるべき。あな恐ろし、殿に奉りて給へ。」といふ。やがて御館にもて參り、仕ふる君を呼出で、しか〳〵の事なむと申す。「いとあやし。大將殿の法師に賜はせしを、いかで童に得させけむ。いぶかし。」とて、まづ急ぎて聞え奉る。

くゝり袴　括袴。指貫を略式に製したるものにして、裾口に厚く綿を入れその裾を紐にて括るやうにしたる袴。

濡れそぼつ　目を見張り、口をあくることにて、驚く樣。

君打笑み給ひ、「かのえせ法師、あなづらはしく幼げなる物くれしとて、腹立たしくや思ひけむ、わが門の前に捨てゆきつるよ。一度汚れし物、その童に取らせよ。」とて、とりおろさせ給ひぬ。

西行、後にこの事を人に語りていふ、「右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟德の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入れられたるは、わが佛の冥福といふものを生れながら得させけむ。唯悲しむべきは、神の御裔の、この後やう〳〵衰へさせ給はむ世の姿なるは。」とて、涙とゞめ難くして物語りきとなむ。心なき身にも、これを聞傳へては、秋の夕暮ならずも、うちひそみぬべし。

（上田秋成―藤簍冊子）

あなづらはし　かるゞしし。

右府　右大臣の唐名。こゝにては源頼朝を指す。

口に蜜云々　唐書に、「世謂ニフ林甫ハニリテ口有レ蜜腹ニリトニ有レ劍。」とあり。

漢高　漢の高祖のこと。名は劉邦。漢朝四百餘年の基を開く。

曹孟德　曹操。孟德はその字。魏の武帝。

神の御裔　カミのミスエ。皇室のこと。

藤簍冊子　六卷。秋成の歌文集。

俊成　藤原俊成。歌人。千載集の撰者。元久元年歿。年九十一。（一七七四―一八六四）

定家　俊成の子。歌人。新古今集、新勅撰集の撰者。仁治二年歿。年八十。（一八二二―一九〇一）

天禀　北面の武士　院政時代に於ける院の御所侍衛の武官。

厭離

一七　歌人西行

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しくし、鎌倉・室町の世、「そもそも〳〵歌道において定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。」といはれし時、稱讃の聲また定家に讓らず、近世に至りて定家の價値いたく墜落したれども、山家集の一書は、なほいかなる歌人の机邊をも去らず。西行の名、今に嘖々たるは、そもそも〳〵何が故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清（のりきよ）、鎭守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立て、義清また勇敢にして弓術をよくす。和歌に堪能なるは、蓋しその天禀なり。鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど義清は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の

惕然　テキゼン。

棄レ恩入二無爲一　父母妻子等の恩愛を捨てゝ佛門に入る意。

嵯峨　京都市右京區。

右幕下　右大將源頼朝。

動機に就いては、或は傳へていはく、「嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝參朝せんとて、約に從ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、『殿は昨夜頓死し給へり。』とて、若き妻、老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、『棄恩入無爲』は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取縋れるを、思ひ切りて緣より下に蹴落し、これこそ愛著の絆を斷つ始めぞと、顧みもせで家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髮せり。」と稱す。かくて名を西行又は圓位といふ。出家する時保延六年にして、歳まさに二十三なりきといふ。

西行既に世を遁れて、高野に籠り吉野に隱れ、出でては熊野に參り伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西

大師　弘法大師。
桑門　沙門に同じ。
抖擻　トソウ。行脚すること。
高尾　京都府葛野郡高雄山神護寺。
文覺　俗名遠藤盛遠。正治元年歿。年八十。（一七八〇—一八五九）
數寄を立つ

の方は中國より四國に渡りて、大師の靈場を拜み、筑紫にまでも遊ぶ。常に謂へらく、「桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。」と。一个の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺これをにくみ、弟子に告げていはく、「遁世の身ならば一筋に佛道修業の外、他事あるべからず。數寄を立てゝこゝかしこに嘯き歩く條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし。」と。その後高尾の法華會に行脚の僧の參りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。「誰ぞ。」と問へば、「西行と申すもの。」といふ。文覺手ぐすねを引き、望のかなひつる體にて明障子を開けて出づ。暫しまもりて、「年頃承り及びたるに、御訪ね悦び入り候。」とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子達はいかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるにこの體たらく、西行は無事に歸り去りしかば、「日頃の仰せに違ひ

釋迦入涅槃　釋迦の入滅をいふ。涅槃は梵語Nirvanaの音譯。
ねがはくはの歌　山家集に出づ。
雙林寺　京都市圓山公園内にあり。
幽契
宗祇　足利時代の連歌の名人。文龜二年歿。年八十二。（二〇八一—一六二）

たるは。」と怪しみ問ふ。文覺答へて、「あら、いひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面樣か、文覺をこそ打たんずるものなれ。」といへりとぞ。

西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて、詠じて曰く、

ねがはくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月のころ

晩年洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日、七十三歳にして入滅せり。その和歌を集めたるもの、これ山家集なり。

わが國、古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの前後僅かに三人、西行・宗祇・芭蕉これなり。

正風の眼を開く

詩人の吟囊

蹋躇（キョクセキ。）

西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乘じて、また西行・宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、各〻その道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

そも〳〵平安朝の貴紳淑女は、鴨・桂二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ小天地に蹋躇して足幾外に出でず、一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなければ、從つて思想の發展もある事なし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、たゞ同じ詞花言葉を飾るのみに

典型

簸却（ハキヤク。はらひすてること。）

萬朶の花

粉本

肺腑

て累代繼承しゆけば、和歌の思想辭句の上にも、おのづから典型を生じて天眞を忘る。實情を欺き、虛僞に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その內容は空しく、滔々として風を成せる時、西行ひとり蹶起して從來蹈襲の典型を簸却し、みづから山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。平安末期、崇德院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲慘なる實境を詠ぜることの、世上一般の題詠と選を異にすればなり。わけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を模倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後、なほ名聲赫々として、天成の大才と許さるゝもまた宜ならずや。

西行既に古來の典型を捨てゝ、たゞちに自然の堂奧に到らんとす。深く山川草木を愛して、これを視ること猶己を視るが如く、親昵して同情の念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見むの歌　以下三首何れも山家集に出づ。

わきて見む老木は花もあはれなりいま幾たびか春にあふべき

こゝにまたわが住みうくてうかれなば松はひとりにならむとすらむ

にごるべき岩井の水にあらねども汲まば宿れる月やさわがむ

同情は進んで愛著となりぬ。臨終の大事到る時、何物か伴なはん。一切の眷族珍寶皆我と相忤く。かくはかなみて西行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ。一旦の沈淪に昨日の親友も今日の仇敵たる時、山色水聲の我に睦ぶこと舊に依り、訪ふ人もなき山里に心永き春秋は尋ぬることを忘れず。この親切なる自然に對して、その慰藉に報ゆることを知らざる者は冷血無情の人のみ。西行は最も自然

眷屬珍寶相忤く

沈淪　チンリン。

の價値を認めたるもの、從うてこれが愛著の念も遙かに群衆と選を異にしたり。

おのづからの歌　以下二首山家集に出づ。

おのづから花なき年の春もあらば何につけてか日を送らましうちつけにまた來む秋のこよひまで月ゆゑ惜しくなる命かな

愛著は迷なり。この雲を去らざれば、眞如の月は明かなり難しと雖も、山水もと無心にして、人間の如き魔性を有せず。強ひてこれに著するは、また妄執の種なりといへども、これを以て窓前日夜の友とす。清淡虛無、一心もまた物によつて動かされざること山の如く、機に從うて轉ずること水の如し。來往自在、こゝに疑懼の境を去つて、安心は漸くに決定すべし。

清淡虛無

いまさらにの歌　以下二首山家集に出づ。

いまさらに春を忘るゝ花もあらじやすく待ちつゝけふも

くらさむ
今よりはむかしがたりは心せむあやしきまでに袖しをれ
けり

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹來つて松濤卽ち鳴る。その聲必ず自然を離れず、平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦强し。時に婉曲の響あれども、ことさらに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歲の下愈〻光を增して、後人をして渴仰止まざらしむ。

（藤岡作太郎―國文學全史）

天籟
松濤

一八　去年のしをり

西行

よし野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬかたの花
をたづねむ
よし野山やがて出でじとおもふ身を花散りなばと人
や待つらむ
道の邊に清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちとま
りつれ
心無き身にもあはれは知られけり鳴たつ澤の秋の夕
ぐれ
寂しさに堪へたる人の又もあれないほり竝べむ冬の
山里

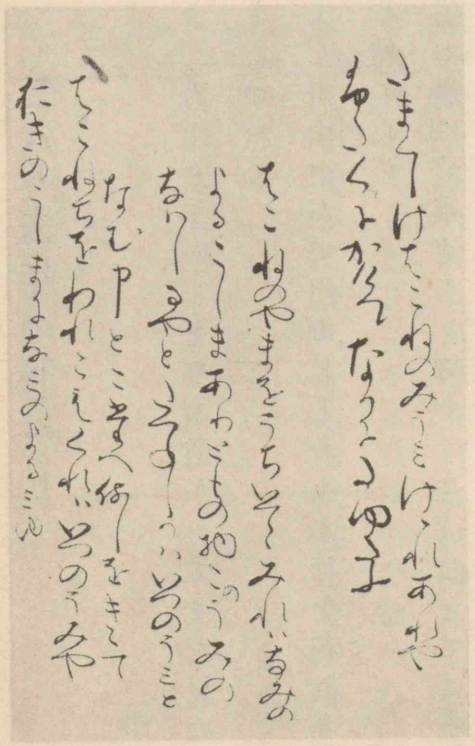
源實朝

源頼朝の子。世に鎌倉右大臣と稱す。歌を藤原定家に學び、萬葉調をよくす。歌集を金槐和歌集といふ。承久元年歿。年二十八。（一八五二―一八七九）

年たけてまた越ゆべしとおもひきやいのちなりけり
小夜の中山

山はさけ海はあせなむ世なりともきみにふた心われ
あらめやも

源　實朝



金槐和歌集

大海の磯もとゞろによする波われて碎けてさけて散
るかも

武士の矢竝つくろふ籠手のうへに霰たばしる那須の
しのはら

山たかみ明けはなれゆく横雲のたえまに見ゆる峰の
しら雪

ときにより過ぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめ
たまへ

吹く風の涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴きて秋
は來にけり

うたかた　水上の泡。
かつ消えかつ結ぶ
玉敷の　都にかゝる枕詞。

一九　日野山の閑居

一　うたかた

ゆく川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。世の中にある人とすみかと、亦かくの如し。玉敷の都の中に、棟を竝べ甍を爭へる、尊き卑しき人の住居は、代々を經て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處も變らず人も多かれど、古見し人は二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死し夕べに生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず生れ死ぬる人、何方より來りて何方へか去る。又知らず、假の宿り、誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を

末葉の宿り　晩年の住居の意。
土居　家の周圍の土の垣。こゝにては家そのものゝ土臺ならん。
掛金　カケガネ。

悅ばしむる。そのあるじと住家と無常を爭ひ去るさま、いはゞ朝顏の露に異らず。あるは露おちて花殘れり。殘るといへども朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて露なほ消えず。消えずといへども夕べを待つことなし。

二　末葉の宿り

こゝに六十（むそぢ）の露消えがたに及びて、更に末葉の宿りを結べることあり。いはゞ旅人の一夜の宿りを造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分が一にだも及ばず。とかくいふほどに齡は年々にかたぶき、住家は折々に狹し。その家のありさま世の常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛金をかけたり。もし心にかなはぬ事あらば、やすく外に移さむが爲なり。その改め造る時、幾

日野山
今の京都市伏見區にあり。

閼伽棚
アカダナ。佛に奉る清淨水を容れたる具を載するために、佛前に構へたる棚。

皮籠
外面を皮にて張りたる箱。

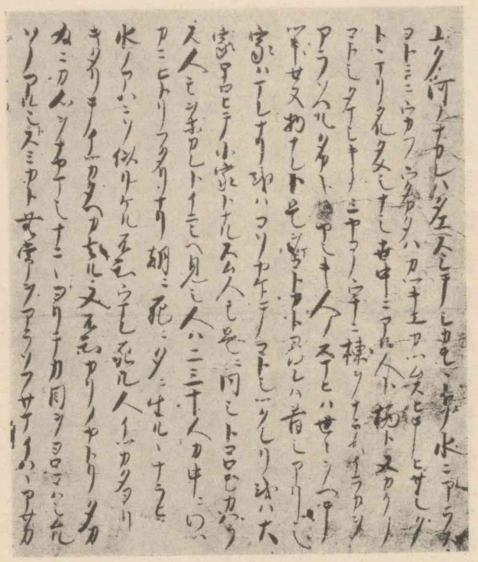
三四合
三四個の意。

往生要集
六卷。源信僧都の著。淨土念佛に歸依すべきことを勸めたるもの。

折筆・つぎ琵琶
何れも用ふる時に接合はせて彈ず。

ばくの煩ひかある。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらず。

いま日野山の奥に迹を隱して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、内には西の垣に沿ひて阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に、普賢ならびに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌・管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に筝・琵琶各〻一張を立つ。いはゆる折筆・つぎ琵琶これなり。東



古本方丈記

蕨のほどろ
蕨の穂の長く延びたるもの。

つかなみ
藁を編みて作る敷物。

正木の葛
衞矛科に屬する蔓生の常綠植物。

死出の山路を契る
死出は來世の意。西方淨土に至らざる限りは苦痛を感ずる故にその艱苦を山路の險難なるにたとへて死出の山路と云ふ。契るは、約束をすること。

空蟬の
空蟬は現身の義にて、命・人・世などにかゝる枕詞。

にそへて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机をいだせり。枕のかたに炭櫃あり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占め、あばらなる姫垣をかこひて園とす。すなはちもろ〳〵の藥草を植ゑたり。假の庵のありさまかくの如し。

その處のさまをいはゞ、南に筧あり。岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木の葛迹を埋めり。谷繁けれど、西は晴れたり。觀念のたより無きにしもあらず。春は藤浪を見る。紫雲の如くして西の方にほふ。夏は時鳥を聽く。語らふごとに死出の山路を契る。秋は蜩の聲耳に滿てり。空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。積り消ゆるさま罪障に喩へつべし。

もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに、

迹のしら波云々
拾遺集、沙彌滿誓の歌に、「世の中を何にたとへむあさぼらけこぎ行く舟のあとの白浪。」とあり。

岡の屋
京都府宇治郡宇治村。

滿沙彌
滿誓沙彌。俗名笠麻呂。歌人。養老五年（一三八一）出家。

潯陽の江
白樂天の詩に、「潯陽江頭夜送レ客、楓葉荻花秋瑟々。」とあり。

源都督
桂大納言源經信。琵琶の名手。承德元年歿。年八十二。（一六七六―一七五七）

妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らむ。もし迹のしら波に身を寄する旦には、岡の屋に行きかふ船を眺めて滿沙彌の風情をぬすみ、もし桂の風、葉をならす夕べには、潯陽の江を思ひ遣りて、源都督の流をならふ。若し餘りの興あらば、しば〳〵松のひゞきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を喜ばしめむとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居るところなり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。若しつれ〴〵なる時は、これを友として遊びありく。彼は十六歲、我は六十。その齡ことの外なれど、心を慰むることは、これ同じ。或はつばなを拔き、岩

秋風・流泉
何れも琵琶の曲名。

岩梨
石南科に屬する木。

ぬかご
むかごのこと。

木幡山
京都府宇治郡。

伏見の里・鳥羽
何れも京都市。

羽束師
京都府乙訓郡。

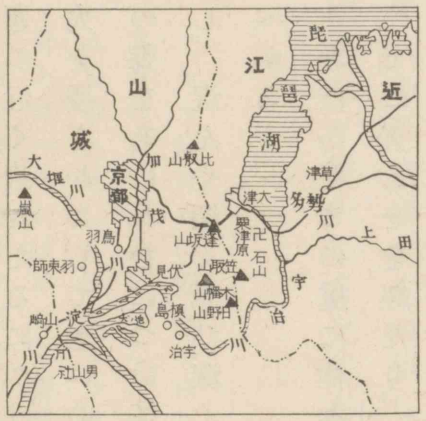
炭山
京都府宇治郡。

笠取
京都府宇治郡笠取村。

岩間
滋賀縣滋賀郡石山村の正法寺の觀音。

石山
滋賀縣滋賀郡石山寺の觀音。

梨を採る。又ぬかごをもり、芹を摘む。或はすそわの田居にいたりて落穗を拾ひてほぐみを作る。若し日うらゝかなれば、嶺に攀ぢのぼりて、遙かに故郷の空をのぞみ、木幡山伏見の里・鳥羽・羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。歩みわづらひなく、志遠くいたる時は、これより嶺つゞき、炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にまうで、あるは石山を拜む。もしは又粟津の原を分けて蟬丸の翁が迹をとぶらひ、田上川を渡りて猿丸大夫が墓をたづぬ。歸るさには、をりにつけつゝ櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家苞にす。もし夜靜かなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠く槇の島



のかゞり火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きては、父か母かとうたがひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或は埋火を搔きおこして、老いの寢覺の友とす。恐ろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色、折につけて盡くることなし。況んや深く思ひ、深く知れらむ人のためには、これにしも限るべからず。

おほかたこの處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを經たり。假の庵もやゝ古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔蒸せり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠り居て後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまたきこゆ。ましてその數ならぬたぐひ、盡してこれを知るべからず。度々の炎上に亡びたる家、又いくそばくぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。

田上川　滋賀縣栗太郡、宇治川の上流。

猿丸大夫　平安朝時代の歌人。三十六歌仙の一。傳記未詳。

槇の島　京都府久世郡にあり。

山鳥の云々　玉葉集、僧行基の歌に、「山鳥のほろ〳〵となく聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ。」とあり。

峯のかせぎ　山家集、西行の歌に、「山ふかみなるゝかせぎのけぢかきに世に遠ざかるほどぞ知らるゝ。」とあり。「かせぎ」は鹿の異稱。

ほどせばしといへども、夜臥す床あり、晝居る座あり、一身をやどすに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る。すなはち人を恐るゝが故なり。われまたかくの如し。身を知り、世を知れゝば、願はず、まじらはず、たゞ靜かなるを望とし、愁ひなきを樂みとす。

（鴨長明―方丈記）

やゝ病身人に倦みて、世を厭ひし人に似たり。倩ら年月の移りこし拙き身の科を思ふに、一たびは仕官懸命の地を羨み、或時は佛籬祖室の扉に入らむとせしも、便りなき風雪に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯の計とさへなれば、終に無能無才にしてこの一筋につながる。樂天は五臟の神を破り、老杜は瘦せたり。賢愚文質の等しからざるも、いづれか幻の栖處ならずやと思ひ捨てゝ臥しぬ。

まづたのむ椎の木もあり夏木立

（芭蕉―幻住庵の記）

埋火云々　堀河院百首の歌の中に、「いふこともなき埋火をおこすかな冬のねざめの友しなければ。」とあり。

恐ろしき山　山家集、西行の歌に、「山深みけぢかき鳥の音はせで物おそろしきふくろふの聲。」とあり。

がうな　やどかりの異名。

鴨長明　賀茂社の禰宜長繼の子。鎌倉時代の歌人。

方丈記　一卷、鴨長明の隨筆。

未曾有
輻湊
貨幣經濟
端緒　タンショ。
封建制度

二〇　江戸幕府の瓦解

江戸幕府が崩解し、明治の新政府が組織せられ、維新の別天地が展開せられたのは、誠に古今未曾有の一大政變であつた。

幕府衰亡王政維新の原因に就いて、詳かに之を考察する時には、政治的にも、經濟的にも、社會的にも、種々なる事情が輻湊して、それが互に原因となり結果となつて、茲に及んだものと解釋することが出來よう。　卽ち貨幣經濟の發達は、農業經濟を基礎とした武士階級の存在を危くすると共に、資本の力を擁する町人階級の勃興を促したことが、言ふまでもなく其の重大な原因の一つであつた。かくて政治上に於ては、武士社會衰亡の端緒を開き、經濟上に於ては、既に國民經濟の過程に入つて富の集中を促し、社會上に於ては、武士と町人との對立を見たのである。　武士を中心とする封建制

出目　雙方の數量を比較したる時の差數。
彌縫
瀰漫

度が、到底永く維持すべからざるは、當然の情勢であつた。　されば當年の所謂武士なるものは、孰れも窮乏に陷つて居たが、中にも特に幕府の如きは、僅かに四百萬石の世帶で、中央政府たるの機能に任じなければならない狀態に置かれてゐたがために、甚しく財政の缺乏を感じ、元祿以來は、支出はいつも收入よりも超過し、貨幣の改鑄による出目によつて、漸く之を彌縫するといふ有樣で、早晩破產を免れることの出來ぬ運命にあつた。

更に他の一面に於ては、學問の發達と共に、國家及び國體に關する國民の自覺が生じ、尊王の思想は油然として上下の間に瀰漫するやうになつた。　公家と武家との二元的勢力の對立は、既に一部國民の承認しない所であつた。　かゝる思想は年と共に進んで行くのであるから、國民思想の上から見ても、幕府の基礎は動搖せざるを得ない。

時の問題

萌芽（バウガ。）

以上述ぶるが如く、貨幣經濟の發達は社會組織の變革を促し、尊王思想の發達は政治組織の變革を促すやうになつて來たことは、武家政治の撤廢と幕府の衰亡とを餘儀なくせしめたもので、其の最後の運命に到達すべきは、もはや時の問題に過ぎないけれども、其の所謂時の問題なるものは、決して近い將來を意味するものではなく、遠い將來を意味するものであつた。假令社會變革の兆が既に現れたとしても、それは單に萌芽を認めたのみである。萌芽が成長して樹木となり花を開き實を結ぶまでにはなほ多くの歳月を要したに相違ない。又尊王論が如何に發達したとはいへ、倒幕若しくは討幕の實行を見るのも、同じく時の力を借らなければならなかつたのである。然るに此の形勢を促進したものは、外國勢力の刺戟であつた。若し外國勢力の刺戟がなかつたならば、王政維新の出現は、なほ程遠い將來に於て行はれたであらう。果し

中道にして挫折す

て然らば外國勢力の刺戟こそ、幕府衰亡、王政維新の最大の原因であると斷定し得ると思ふ。

我が日本の國體に於て、皇室が常に中心であらせられることは、古今を通じて變りはないが、外國の刺戟のある毎に、特に御稜威の發揚を見るのである。別の語を以てすれば、外國の刺戟を受ける時は、必ず國體の本義に就いて自覺することの出來たのは、注意しなければならぬ。大化の改革がそれであり、明治維新がそれであつた。建武中興の如きも、一面に於ては弘安の役の刺戟もあつたが、引續いて國民を驚かすべき事件の發生を見なかつた爲に、中道にして挫折したのである。明治維新の際に至つては卽ち然らず、歐米列强の壓迫は未だ嘗て遭遇しなかつた程の大なる刺戟であつた。一歩を過らば國家民族の存亡に關すべき危機に瀕して居た。此の危機から免れる爲に、國民は期せずして國家の中心を皇

室に求め、所謂尊王攘夷の聲となり、茲に王政維新といふ一大政變が實行せられたのである。故に、予は王政維新の直接原因を以て、外國の刺戟と、外國の刺戟による尊王論の勢力とであると認むるのである。其の他の社會的經濟的原因の如きは、殆ど語るに足りないと思ふ。

近時一部の批評家の間には、王政維新を、英吉利や佛蘭西の革命と比較して、所謂第三階級の輩が、封建貴族に反抗して起つた革新であると解釋する者多く、且かなり有力であるかの如くに思はれるけれども、私は之に同意することが出來ない。なる程江戸時代には町人閥が發達し、彼等は其の富を擁して、隱然武士階級を壓するの概があつたのは事實である。且彼等の或者は、相當の知識を有し、自覺によつて動くべき力を有してゐたことも、亦事實であるに相違ない。けれども徒に知識と力とを有するのみで、未だ此の

力を動かすべき自覺を有しては居なかつた。當年の國民の意とする所は、たゞ如何にして歐米諸國の壓迫から免れて、國家の獨立を維持すべきかにあつた。故に其の改革運動は、純然たる政治運動である。我が國に於て資本主義的色彩の鮮かになつたのは、明治以後殊に日露戰爭以後の事に屬する。蓋し王政維新の既に成つた後、かねてから萌して居た社會變革の情勢が之を動機として擡頭した。王政維新は、其の原因であつて、其の結果ではない。現に維新の志士中には多數の富豪があるけれども、彼等が幕府を倒し、又封建制度の破壞に努力したのは、他の志士と同じく國家を擁護せんが爲の手段であつた。要するに幕府の衰亡王政維新は、政治的原因に基づいて行はれたものである。

（井野邊茂雄―幕末史概說）

擡頭　タイトウ。

擁護　ヨウゴ。

井野邊茂雄　史料編纂官。國學院大學教授。高知縣の人。明治十年生。

一代の宗師
百世の儀表
迦毘羅城　カビラジャウ。古代中印度にありし王國の都城。
淨飯王　ジャウボンワウ。迦毘羅國の王。
摩耶夫人　摩訶摩耶。淨飯王の妃
佛陀　ブッダ。梵語。Buddhaの音譯。智者の意。
正覺　シャウガク。邪を離れ、妄に背きし大悟。
徹底
天竺　印度の古名。

二　世界の四聖

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば、誰かこれを能くせん。釋迦・孔子・ソクラテス・基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は西暦紀元前凡そ六百年の頃、印度迦毘羅城の王家に生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人、其の本名を悉達多と云ふ。釋迦は迦毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道後の尊號なり。身は一國の太子に生れたれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳、妻子を捨てゝ王城を逃れ、山林に隱れて道を修むること六年、終に人生の奧義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘にして跋提河の邊に歿しぬ。

巡錫　ジュンシャク。僧侶が各地を巡歷して布教すること。
教化　ケウゲ。教へ導きて、善に化せしむる義。
跋提河　バツダイガ。源をネパールに發し、南流してガンヂス河に合流す。
元々
萬民の意。
歸命　キミヤウ。深く佛の教に從ふこと。
木鐸　ボクタク。支那の古代、政教を施すとき、振りて人民に警告するに用ひたる金口木舌の鈴。轉じて、世の指導者。

今の佛教は卽ち釋迦一代の教訓に本づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を慕ひて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その流派を樹てゝ相爭ふ所は畢竟名目上の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その洪大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、世人をしてその歸依する所を知らしめたり。

苦行釋迦圖　曾我蛇足筆

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を距る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃魯國

魯國　周公の子伯禽の封ぜられし國。今の山東省の中にあり。
定公　魯の二十四世の君。
大司寇　司法裁判のことを掌る長官。
齊侯　齊の景公。
遊說　イウゼイ。
春秋　周の平王四十九年より敬王三十九年に至る二百四十二年間。（西紀前七二二―四八一）
陵夷　丘陵の次第に平かになる義にして、事の漸次衰退するをいふ。
狂瀾を既倒に廻す

の官吏となり、傍ら子弟を教へて、夙に令聞あり、學德愈〻進む。魯の定公の時に至り、擢んでられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、內外その風采を想望す。時に齊侯、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歲の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊說を試みぬ。當時の支那は所謂春秋の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にしてその君を弑するものあり、子にしてその親を害するものあり。强は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。敎化の陵夷、風俗の頹廢、未だ曾てこの時の如きはなかりき。孔子、既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻さんとす。志や高且大なりと謂ふべし。

此の如くにして四方に漂浪すること十三年。時非にして道容

名敎　聖人の敎。
蹉跎　サタ。つまづきて進まざるさま。
天を怨みず云々　史記、孔子世家に、「及ニ西狩ニ見ル麟ヲ曰ク、吾道窮ス矣。喟然トシテ歎テ曰ク、莫レ知レ我ヲ夫。子貢曰ク、何爲レ莫レ知ニ夫子ヲ。子曰ク、不レ怨ミレ天不レ尤メレ人、下學而上達スルヲ。知レ我者其レ天乎。（中略）君子病ヒテ歿ヒテレ世而名ノ不レ稱ルヲセラレ。吾道不レ行ハレ矣、吾何ヲ以テカ見エン於後世ニ哉。」とあり。

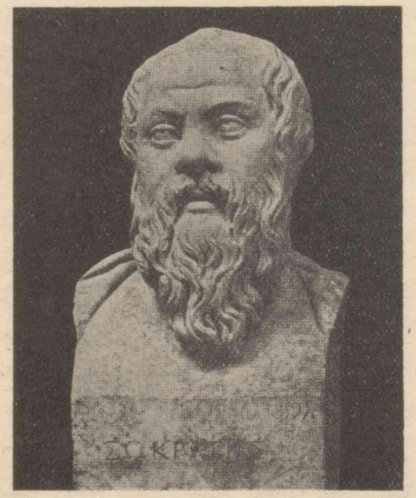
れられず、世また耳を名敎に傾くる者なし。こゝに於て、已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼わが道遂に窮す。世遂に我を知る者なきか。」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知る者なからんや。」と。孔子對へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。我を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。わが道行はれずば、われ何を以てか後世に見えんや。」と。幾ばくもなくして歿す。時に年七十三。

ソクラテスは、希臘の雅典に住める一彫刻師の子なりき。その生れたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦・孔子と年を隔つること八九十年なり。東西の聖人、殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は、所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭にとゞまり、道德は空文の上にのみ尙ばれたり。其の狀、なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社

子貢　孔門十哲の一人。衞の人。
ソクラテス　Socrates
雅典　アテネ。古代希臘アッチカ州の首都。
詭辯學派　ソフイスト(Sophist)の譯。西紀前第五世紀の後半に、一時希臘に勢力ありし哲學者の一派。その始祖をプロータゴラスといふ。
跋扈
侃諤　カンガク。剛直にして言を曲げざること。
喬木は風に折らる
讒訴　ザンソ。
傲岸不遜　ガウガンフソン。尊大にして人に屈せずへりくだらざること。
アスクレピオス　Asklepios　醫術の神。

會の實際に關して、殆ど裨益する所なかりき。ソクラテスは慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛んに道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て、辯難攻擊して一歩も假借せず、侃諤の正義、その稀代の雄辯と相伴ひて一世を風靡せり。

然るに、喬木は風に折らるゝの喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざる者相謀りて、國法に背ける者としてソクラテスを讒訴せり。その訴狀に曰く、「ソクラテスは國教を信ぜずして異教を創め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものなりき。慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども判官は、ソクラテスを以て傲岸不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く、「命のみ。」と。その獄中にあるや、常にその門弟子を集めて、生死・靈魂・未來のことを說き、人の脫獄を勸むるものに對しては、輙ち答へて曰く、「予はたゞ正義に導かれんのみ。死又何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上にあるを知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、「爾一鷄を以てアスクレピオスの神に捧げよ。」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスは、此の如くにして逝きぬ。年七十。


ステラクソ

基督は本名を耶蘇といふ。基督は「膏灌がれたる者。」といふ義に

ベテレヘム Bethlehem　イエルサレムの南方の一小村。
ヨセフ Joseph　ユダヤ人ナタンの子。
マリヤ Maria　ヨセフの妻。ベテレヘムの旅舍に於て耶蘇を產む。
豫言者　神の名によりて未來を語る者。
ヨハネ Johane　洗禮者と稱せらる。基督の先驅者。
福音　フクイン。世人に光明幸福を與ふる神誡。
胚胎　ハイタイ。きざすこと。事物の起原。

して、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベテレヘムに生る。その生後四年を以て、西曆紀元第一年となす。父はヨセフと呼べるいやしき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歲の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間、猶太の各地を歷遊し、諸〻の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。

抑〻當時は羅馬帝國の榮華その極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜して、益〻放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し、形式に拘泥して空しく人を惑はすのみ。茲に於て、一世の人心は缺焉として偉人の現出してこの暗黑の社會を照破せんことを渴望せり。基督この間に生れ、自ら「救世の使命を負へる神の子。」と稱し、昂

收斂　シウレン。苛酷なる租稅をとりたつること。
缺焉　ケツエン。物足らざるさま。
磔殺の刑　アンゼン。
晏然　神よ云々　路加傳第二十三章三十四節に見えたる言葉。
イェルサレム云云　同二十七節以下にある言葉。イエルサレム(Jerusalem)は猶太の首府。
轗軻不遇　カンカフグウ。

然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶學者官吏等、これを喜ばず。以て猥りに新法異說を唱へて、民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處せり。基督豫めこの事あらんを慮り、晏然として騷がず、靜かに祈りて曰く、「神よ彼等を許せ。彼等はその爲すべき所を知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「イェルサレムの女子よ、我がために哭くことなかれ。唯己と己の子とのために哭け。」と。かくの如くして、基督が三十三年の短き生涯は十字架上の露と消去りぬ。基督の死後、その弟子等は、激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘めぬ。基督教卽ちこれなり。

以上は四聖の略傳なり。その人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し崇拜すべき所なり。四聖の內、釋迦を除いては いづれも轗軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に

經綸　ケイリン。

得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とは、いづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と竝びて十字架上に釘殺せられたり。悲慘なりといふべし。然れども、これらの人々の志す所は、天下後世にありて、現世の禍福と一身の安危とは、毫もその顧慮する所にあらず。故にその死に就くや、晏然として猶歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却つて「わが道行はれずば、われ何を以てか後世に見えん。」と嗟歎せり。釋迦は衆生のためにその妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて揚言して曰く、「正義を信ずる者に取りて、死はた何爲るものぞ。我をして一日の生あらしめんか、その一日卽ち國民の迷を覺さゞるべからず。」と。基督は己を罪に陷るゝ者のために神に祈りたり。嗚呼何ぞその慈悲の洪大にして無邊なる。

煩惱　ボンナウ。欲情のわづらひ。

涅槃　梵語 Nirvana の音譯。ネハン。迷ひを脫して眞理を得る義。

我の一念　自己に執著する妄念。

身を修め云々　大學に、「古之欲レ明ニ明德於天下ニ者、先治ニ其國ニ、欲レ治ニ其國ニ者、先齊ニ其家ニ、欲レ齊ニ其家ニ者、先修ニ其身ニ、欲レ修ニ其身ニ者、先正ニ其心ニ、欲レ正ニ其心ニ者、先誠ニ其意ニ、欲レ誠ニ其意ニ者、先致ニ其知ニ、致知在ニ格物ニ、物格而後知至、知至而後意誠、意誠而後心正、心正而後身修、身修而後家齊、家齊而後國治、國治而後天下平。」

四聖はその生れたる處と時とを異にす。故にその教理にも、また多少の差違なきを得ず。今その要を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は、煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始まりて苦に終る。生老病死、いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は「我」の一念に執著するにあり。故に吾人は「我」の一念を脫却して無我無念の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃卽ちこれなり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生れながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うする能はざるもの多し。教育の要こゝ於てかあり。既に教育を

其意。」とあるによる。

行は百行の本　古文孝經の序にあり。

知德合一

山上の垂訓　馬太傳第五章より七章に亙りて出づ。基督が山上にて說きたる敎訓。

受けて、身既に修まらば、家自ら齊ふべく、家齊はゞ、國自ら治まるべく、國治まらば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の敎は一身の修養に始まり、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテスの敎は、所謂知德合一說なり。おもへらく、眞正の知識は卽ち道德なり。故に行ふと知るとは、もと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識・道德の眞正なるものにあらず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となせば、正義自らその中にあり。正義は靈魂の滿足なり。靈魂は肉體と異りて、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ時、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴のために存せず。然れども富貴は道德の中に在りと。

基督の敎は愛の敎なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は、三年間の傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。曰く、「心

梁木　うつばり。

の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は憐みを得べければなり。心の淸きものは福なるかな、その人は神を見ることを得べければなり。惡に敵するなかれ、人若し汝の右の頰を打たば、左の頰をも轉じてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために、義をその前に行ふなかれ。右の手に爲す所を左の手に知らしむるなかれ。僞善者の行に倣ふなかれ。隱れたるをみ給ふ神は、あらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞおのが目にある梁木を見ざるや。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩けよ、然らば啓かれ

ん。窄き門より入れ。沈淪に至る門はその路大きく、これに入る者は多し。嗟呼、いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、これを得るもの〻少きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるは、砂上に屋を建つる愚人の如し。」と。基督教の精髄は實にこの山上の垂訓に存す。

此の如きは、四聖の傳記、及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してその教の今尚凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に依りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは、實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。その遺德の高大なる、それ何を以てかこれに比せんや。

（高山樗牛―樗牛全集）

庭燎　テイレウ。ニハビ。禁中に於て御神樂の際焚きて明りとする篝火。こゝは、昭和四年伊勢神宮の遷宮式の際なり。

内院　神社の瑞籬（みづがき）の内。

自修文

一　庭燎に奉仕して

神の御庭をきよめし雨またくやみて、内院の夜はおごそかに、ぬばたまの闇につゝまれたり。物の光とては、御階の下に置ける火桶の燈かげのさゝやかなると、吾等が仕うまつる庭燎の光とのみ。折々あかう燃えたつ火あかりに、正殿の千木・堅魚木の御金具、わづかに輝けり。天地の中に物の音なし。唯をり〳〵ひそかに聞ゆるは、遠方の老杉群のかげなる鈴蟲の聲のみ。神祕深き沈默（しじま）の中に畏みをることしばし。

勅使をはじめ、祭主の宮、大宮司以下、神官の列の參入あり。さはれ、きこゆるはたゞ履の音のみ。勅使は、御道敷の白布の上に裾を

松明　タイマツ。
奏申　奏上に同じ。
召立　メシタテ。人々を呼び立つること。
宮掌　クジャウ。
神儀
渡御
神皇正統記云々　「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。わが國のみ此の事あり。異朝には其のたぐひなし。」とあり。
神典　神の事蹟を記したる書。

長くひき、御階の下に進みて、かたへよりさゝぐる松明の光に、御祭文を奏申せらる。大宮司・小宮司は、正殿にまゐのぼりて、御扉を開き奉る。その音の尊さ。

をりしも謠ひいづる御神樂歌、かなでいづる樂の調べのめでたさ。召立のこと終へて、宮掌がとなふる雞鳴三聲の朗かさ。やがて神儀渡御あらせらるゝや、庭燎の上には、水もてぬらしゝ莚をおほひて、光またく消されぬ。

神代おぼゆるこの御式を、まなかひにをろがみまつりつゝ、胸のうちにうかべるは、神皇正統記の卷首の句なり。身神國に生れ、幼くより神典に養はれて、今宵この神事に奉仕す。何らの幸ぞ。何らの喜ぞ。感極まりて、たゞ忝さの涙ぞこぼるゝ。

（佐佐木信綱）

長谷寺　奈良縣磯城郡初瀬町にあり。
不退轉　一途に佛を信じ心を他に散らさざること。
烏滸　ヲコ。おろかなること。
高野の蘭若・比叡の佛刹　高野山・比叡山の寺院をさしていふ。蘭若は梵語 Aranya の音譯にして、閑寂なる意。寺院のこと。

二　長谷寺

一

頼み難きは我が心なり。事あれば忽ちに移り、事なきも亦動かんとす。生じ易きは魔の緣なり。念を恣にすれば直ちに發り、念を正しうするも猶起らんとす。この故に心は大海の波と搖ぎて定まる時なく、緣は荒野の草と萌えて盡くる期あらねば、たまゝ大勇猛の意氣を鼓して、不退轉の果報を得んとする者も、今日の緣にひかれて舊年の心を失ふ輩は、可惜舟を出して彼岸に到り得ず、憂くも道に迷ひて穢土に復還るに至る。されば心を治むるは靈地に身を置くより好きは無く、緣を遮るは淨業に思を傾くるを最も勝れたりとなす。木片の藥師、銅塊の彌陀は、皆これ我が心を呼ぶの設け、崇め尊まぬは烏滸なるべく、高野の蘭若、比叡の佛刹、いづ

れか道の念を勵まさゞらん、まゐり到らざるは愚なるべし。古の人の、麻の袂を山おろしの風に翻し、法衣の裾を野路の露に染めつつ、東西に流浪し、南北に行きかひて、幾干の坂に谷に走り疲れながら、猶辛しともせざるものは、心を靈地の靈氣に涵し、念を淨業の淨味に育みて、正覺の曉を期すればなり。鏡に對ひては髮の亂れたるを愧ぢ、金を懷にすれば慾の亢るを致す習、善くも惡しくも其の境に因り、其の機に隨ひて、凡夫の思惟は轉ずるなれば、たゞ後の世を思ふものは、眼に佛菩薩の尊容を仰ぎ、口に經陀羅尼の法文を誦して、夢にも現にも市塵榮華の巷に立入ることなく、朝も夕べも山林閑寂の鄕に行ひすましてあるべきなり。

首を回らせば往時をかしや。世の春秋に交りて、花には喜び、月には悲しみ、由無き七情の往來に、泣きみ笑ひみ過しゝが、思ひたちぬる墨染の衣を纏ひしより、今ははや指をかゞなふれば、十餘り三

正覺の曉　悟道に達したる時をいふ。

經陀羅尼

七情　佛敎にていふ。喜・怒・哀・樂・愛・惡・欲の稱。

年に及びて秋も暮れたり。修行の年も漸く積りぬ。身も亦初老に近づきぬ。さすが心も澄渡りて、亂るゝことも少くなり、舊緣は漸く去り盡して、胸にまつはる雲もなし。忽然として其の初め一人來りし此の娑婆に、今は孑然として一人立つ。待つは機の熟して果の落つる我が命終の時のみなり。あら快の今の身よ。氷雨降るとも、雪降るとも、憂ひを知らぬ雲の外に嘯き立てる心地して、浮世の人の厭ふ冬さへ、却つてなか〳〵をかしと見る此の我が思の長閑けさは、空飛ぶ禽も啻ならず。されど禪悅に著するも、亦これ修道の過失と聞けば、ひとり一室に籠りゐて、驕慢の念を萌さんよりは、歩を處々の靈地に運びて、寺々の御佛をも拜み奉り、聖緣を結びて魔緣を斥け、佛事に勤めて俗事に遠ざからん方賢かるべしとて、其處に一日、彼處に二日と、この御佛かの御佛の別ちもなく、それぞれの御堂を拜み巡りては、或は祈願を籠めて參籠の誠を致し、

孑然　ゲツゼン。

禪悅に著す　禪悅は修行して得らるゝ禪味の樂みをいふ。著は執著の意。

聖緣　聖道の助緣。

既往
キワウ。

或は和歌を奉りて讃歎の意を表し來りけるが、佛天の御思し召にもかなひけん、聊か冥加もありと思しく、幸に道心の外の他心も起さず、勝縁を妨ぐる魔縁にも遇はで、終に今日に及ぶを得たり。既往の誠に欣ぶべきに、將來の猶頼まゝほしく、長谷の御寺の觀世音菩薩の御前に、今宵は心ゆくほど法施を奉らんと立出でたるが、夜夜に霜は募りて、樹々に紅は增す神無月の空のやゝ寒く、夕日力なく春づきて、晩れし百舌鳥の聲のみ殘る、暮方のあはれさの身に浸むことかな。見れば路の邊の草のいろ〳〵、それとも分かず、皆何れも同じやうに枯果てゝ崩折れて偃せり。珍らしからぬ冬野のさま、取出でていふべくはあらねども、折からの我が懷に合ふところあり。情を結び詞を束ねて、歌ともならばなして見ん。おゝそれよ。「さま〴〵に花咲きたりと見し野邊の同じ色にも霜枯れにけり。」嗚呼我人とも終にはかく男女美醜の別ちもなく、同じ色に

五欲
色・聲・香・味・觸の五つの欲念。

西行
俗名佐藤義清。歌僧。鳥羽上皇に仕へ、北面の武士たり。二十三歲にして出家す。建久元年歿。年七十三。（一七七八―一八五〇）

霜枯れんに、何の翡翠の髪の狀、花の笑の顏かあらん。まして夢を彩る五欲の歡樂、幻を織る四季の遊娛、いづれか虛妄ならざらん。たゞ勤むべきは菩提の道、南無佛々々々と觀じ捨てゝ、西行獨り路を急ぎぬ。

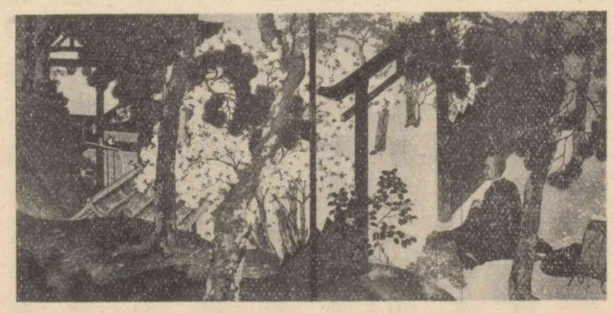
二

弓張月の漸う光りて、入相の鐘の音も收る頃、西行は長谷寺に著きけるが、問ひ驚かすべき法の友の無きにはあらねど、問ひも寄らで、觀音堂に參り上りぬ。さなきだに梢透きたる樹々をなぶりて、夜の嵐の誘へば、はら〳〵と散る紅葉なんどの、空に狂ひて吹入れられつゝ、法衣の袖にかゝるもあはれに、また佛前の御燈明の目瞬しつゝ、萬般の物の黑み渡れるが中に、いと幽かなる光を放つも趣あり。法華經の品第二十五を聲低う誦するに、何となく平時よりは心も締りて、身に浸み渡る思のすれば、猶誠を籠めて誦し行くに、

天も靜けく、地も靜けく、人も全く靜まりたる、時といひ處といひ、相應じて我が耳に入るは我が聲ながら、若しくは隨喜佛法の鬼神などの、聲を和せて共に誦するかと疑はるるまで、上なく殊勝に聞え渡りぬ。特に參りたる甲斐はありけり、菩薩も定めしかゝる折のかゝる所作をば善哉として、必ず納受し給ふべし。今宵の心の澄切りたる、此の淸しさを何に比へん。餘りに有難くも尊く覺ゆれば、今宵は夜すがら、この御堂の片隅になり趺坐なして、曉天がたになほ一度誦經し參らせて、さて其の後香華をも淨水をも供じて罷らんと、西行やがて三拜して、御佛の御前を少し退り、影暗き一隅に身をねぢ据ゑ、凍れる水か

隨喜佛法の鬼神　佛法守護の神をいふ。

趺坐　フザ。足を組みて坐ること。



西行　矢澤弦月筆

枯れし木の、動きもせねば音も立てず、寂然として坐し居たり。

夜は沈々と漸く更けて、風も睡れる如くなりぬ。右左に竝びて立ちたりける御燈明は、一つ消え、又一つ消えぬ。今は只いと高き吊燈籠の光朦朧として力なきが、夢の如くに殘れるのみ。こゝの僧どもは寒氣に怯ぢて、所化寮に爐をや圍みてあるらん、影だに終に見するもの無し。いふべき方もなく靜かなれば、日比燒きたる餘氣なるべし、今薰ゆるとにはあらぬ香の、有るか無きかに自ら匂を流すも、いと良く知らる。かゝる折から何者にや此方を指して來る跫音す。御佛に仕ふるこの寺の者の燈燭をつぎ參らせんとて來つるにやと打見るに、御堂の外は月の光白々として、霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さに堪へでや、頭には何やらん打被きたれど、正しく僧形したるが歩み寄るさまなり。心を留むるとにはあらざれど、何としもなくなほ見てあるに、やがて月の及ばぬ闇

所化寮　僧侶の起臥する居間。

の方に身を入れたれば、さだかには知れぬながら、この御堂に打向ひて、一度は先づ拜み奉り、さて靜々と上り來りぬ。御堂は狹からぬに、燈は螢ほどなり。燈の高さは高し、互のほどは隔りたり。此方を彼方は有りとも知らず、彼方を此方は良くも見得ねば、西行はたゞ我と同じき心の人も亦有りけるよと思ふのみにて打過ぎたり。彼方は固より闇の中に人有ることを知らざれば、何に心を置くべくもなく、御佛の前に進み出でつ。いとつゝましげに危坐りて、數多たび合掌禮拜なし、一心の誠を致すと見ゆ。同じ菩提の道の友なり。其の心操の淺間ならぬも、夜深の參詣に測り得たり。衣の色さへ辨ち得ざれば、面はまして見るべくも無けれど、淨土の同行の人なるものを、呼掛けて語らばや、名をも問はゞやと、西行は胸に思ひけるが、卒爾に物言はんは惡しかるべし、祈願の終つて後にこそと、心を控へて伺ふに、彼方は數珠を取出して、さや〳〵とば

卒爾　ソツジ。

かり擦りそめたり。針の落つる音も聞くべきまで、物靜かなる夜の御堂の眞中に在りて、水精の數珠を擦る音の亮かなる響、いと冴えて神々し。御經は心に誦するとおぼしく、萬籟絶えたるに珠の音のみをたゞ緩やかに響かす。その聲或は明かに、或は幽かに、或は高く、或は低く、寢覺の枕の、半ばは夢に霰の音を聞くが如く、朝霧晴れぬ池の面に、菡萏の急に開くを聞くが如く、小川の水の獨り咽ぶか、雨の紫竹の友擦れか、山吹にほふ山川の蛙鳴かと過たれて、いとをかしくも聞きなさるれば、西行感に入つてありけるが、期したるほどのことは仕果てゝや、其の人數珠を收めて、御佛をば禮拜すること數多たびしつ、やをら身を起して退らんとす。菩提の善友、淨土の同行、契を此の土に結ばんには、今こそ言葉を懸くべけれと、「思ひ入りて擦る數珠の音の聲澄みておぼえずたまる我がなみだかな。」と、西行俄かに詠みかくれば、彼方は始めて人あるを知り、思ひ

菡萏　蓮。

紫竹　幹に紫黑色の斑ある竹。苦竹の類。

がけぬに驚きしが、「何と仰せられしぞ、今一度。」と心をおし鎭めて問返す。聞きかねけんと猜するまゝ、「思ひ入りて擦る數珠の音の聲澄みて。」と再び言へば後は言はせず、「君にておはせしよ、こはいかに。」と涙に顫ふおろ〳〵聲、言葉の文もしどろもどろに、身を投伏して取附きたるは、聲音に紛ふかたもなき、其の昔偕老同穴の契深かりし我が妻にてありけり。

（幸田露伴―二日物語）

偕老同穴の契　夫婦の契。

西國へ修行してまかりける折、小嶋と申す處に、八幡のいははれ給ひたりけるにこもりたりけり。年へて又その社を見けるに、松どものふる木になりたりけるを見て、

むかしみしまつは老木になりにけり我がとしへたるほども知られて

（山家集）

賴光　源滿仲の子。治安元年（一六一八）歿。享年未詳。

鬼童丸　始め比叡山にありしが、力に任せて狼藉を極め遂に逐はれて市原野の岩窟に棲み、世人を惱ましきといふ。

賴信　賴光の弟。

公時　坂田公時。賴光の臣。四天王の一人。

はしたなし

盃酌　ハイシャク。

いましむ　縛る。

三　賴光と鬼童丸

賴光朝臣、寒夜に物へありきて歸りけるに、賴信の家近くよりたれば、公時を使にて、「只今こそ罷り過ぎ侍れ。此の寒さこそ、はしたなけれ。美酒侍るや。」といひたりければ、興に入りて、「只今見むやうに申し給ふべし。この仰事によろこび思ひ給へ候。御渡りあるべし。」と、いひければ、賴光すなはち入りにけり。

盃酌の間、賴光厩の方を見やりたれば、童を一人いましめておきたりけり。あやしと見て、賴信に、「あれにいましめておきたるものは誰そ。」と問ひければ、「鬼童丸なり。」とこたふ。賴光驚きて、「いかに鬼童丸などをあれていにはいましめ置き給ひたるぞ。あやふきものを。」といはれければ、賴信、「實にさる事候。」とて、郎等を呼びて、猶したたかにいましめさせければ、金鎖をとり出でて、能く逃げぬやうに

したゝめけり。鬼童丸、頼光宣ふ事を聞くより、口惜しきものかな、何ともあれ、夜のうちに、この恨をばむくいむずるものをと思ひ居たりけり。盃酌數獻になりて、頼光も醉ひて臥しぬ。頼信も入りにけり。

夜更け靜まる程に、鬼童丸究竟のものにて、いましめたる金鎖ふみ切りて遁れ出でぬ。狐戸より入りて、頼光の寢たる天井の上にあり。この天井引きはなちて落ちかゝりなば、勝負すべき事異儀あらじと思ひためらふ程に、頼光もたゞ人にあらねば、早くさとりにけり。落ちかゝりなば大事と思ひて、「天井に鼬よりも大きに、貂よりも小さきものゝ音こそすれ。」と、いひて「誰か候。」と、呼びかければ、綱、名のりて參りけり。「明日は鞍馬へまゐるべし。いまだ夜をこめて、是よりやがて參らむずるぞ。某々供すべし。」と、いはれければ、綱承りて、「皆是に候。」と、申してゐたり。

數獻　スコン。

鼬　イタチ。

貂　テン。

綱　渡邊綱。頼光の臣。四天王の一人。

鞍馬　京都府愛宕郡にある山。

鬼童丸この事を聞きて、こゝにては今は叶ふまじ。醉ひ臥したらばとこそ思ひつれ。なまさかしき事しいでては、惡しかりなむと思ひて、明日の鞍馬の道にてこそと思ひかへして、天井をのがれ出でて、鞍馬のかたへ向ひて、市原野の邊にて、便宜の所をもとむるに、立ちかくるべき所なし。野飼の牛のあまたありける中に、殊に大きなるを殺して、路次に引きふせて、牛の腹をかきやぶりてその中に入りて、目ばかり見出して待ちけり。頼光、案のごとく來りけり。淨衣に太刀をぞ佩きたりける。綱・公時・定通・季武等、皆共にありけり。頼光、馬をひかへて、「野のけしき興あり。牛その數あり。おの〳〵牛追ふものあらばや。」と

鞍馬山

市原野　京都より鞍馬へ行く途中にあり。

定通・季武　共に平氏。前出公時・綱と共に頼光の四天王といふ。

いはれければ、四天王のともがら、我も〳〵とかけて射けり。誠に興ありてぞ見えける。その中に、綱いかゞ思ひけむ、とがり箭をぬきて、死にたる牛にむかひて、弓を引きけり。人あやしと見る所に牛の腹のほどをさして、矢をはなちたるに、死にたる牛ゆす〳〵とはたらきて、腹の内より、大の童の打刀をぬきて走り出で、頼光にかかりけり。見れば、鬼童丸なりけり。矢を射たてながら、猶事ともせず、敵に向ひけり。頼光は少しもさわがず、太刀をぬきて、鬼童丸が頭を打落してけり。やがても倒れず、打刀を抜きて、鞍のまへつわを突きたり。さて頭はむながいにくひつきたりけりとなむ。死ぬまで猛くいかめしう侍りけるよし、語りつたへたり。まことなるにや。さて頼光はそれより歸りにけり。

（古今著聞集）

蕭條として石に日の入る枯野かな　　蕪村

まへつわ　鞍の前輪。
むながい　鞅（むながき）の音便。鞅は馬具にして馬の胸より鞍橋（くらほね）にかくる緒。
古今著聞集　二十卷。建長年間に成りし橘成季の著。種々の説話を集む。

白河樂翁侯　松平定信。
寛政　光格天皇の御代の年號。（二四四九―二四六〇）
知恩院　京都市東山區にあり。浄土宗の本山。
同心　江戸幕府の職名。奉行・所司代・大番頭・書院番頭等の配下に屬し、與力の下に雑務を掌る役。

四　高瀬舟

いつの頃であつたか。多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃ででもあつたであらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで類のない珍らしい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類はないので、舟にもたゞ一人で乘つた。

護送を命ぜられて、一緒に舟に乘込んだ同心羽田庄兵衛は、たゞ喜助が弟殺しの罪人だと云ふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、此の痩肉の、色の蒼白い喜助の樣子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役

人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな、溫順を裝つて權勢に媚びる態度ではない。

溫順を裝つて權勢に媚びる

庄兵衞は不思議に思つた。そして舟に乘つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の擧動に細かい注意をしてゐた。

其の日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪郭をかすませ、やう〳〵近寄つて來る夏の溫かさが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつた頃からは、邊がひつそりとして、たゞ舳に割かれる水のさゝやきを聞くのみである。

舳（へサキ。）

夜舟で寢ることは、罪人でも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に從つて、光の增したり減じたりする月を仰

いで默つてゐる。その額は晴やかで、目には微かな輝きがある。

庄兵衞はまともには見てゐないが、始終喜助の顏から目を離さずにゐる。そして不思議だ、不思議だと心の內で繰返してゐる。

それは、喜助の顏が、縱から見ても、横から見ても、いかにも樂しさうで、若し役人に對する氣兼がなかつたなら、口笛を吹き始めるとか、鼻唄を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衞は心の內に思つた。これまで此の高瀨舟の宰領をしたことは幾度だか知れぬ。併し載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な樣子をしてゐた。それに此の男はどうしたのだらう。遊山船にでも乘つたやうな顏をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしや其の弟が惡い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。此の色の蒼い瘦男が、其の人の情と云ふものが全く缺

宰領（サイリヤウ。取締り。）

遊山船（ユサンブネ。船遊の船。）

辻褄の合はぬ言語

けてゐるほどの、世にも稀な惡人であらうか。どうもさうは思はれぬ。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いや〳〵それにしては何一つ辻褄の合はぬ言語や擧動がない。此の男はどうしたのだらう。庄兵衞には、喜助の態度が考へれば考へるほど分らなくなるのである。

暫くして、庄兵衞は悚へ切れなくなつて呼掛けた、

「喜助、お前何を思つてゐるのか。」

「はい。」

と云つて邊を見廻した喜助は、何事をかお役人に見とがめられたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して庄兵衞の氣色を伺つた。

庄兵衞は、自分が突然問を發した動機を明して、役目を離れた應對を求めるいひわけをしなくてはならぬやうに感じた。そこで

かう云つた。

「いや、別に譯があつて聽いたのではない。實はな、先刻からお前の島へ往く心持が聽いて見たかつたのだ。己はこれまで此の舟で大勢の人を島へ送つた。それは隨分色々な身の上の人だつたが、どれも〳〵島へ往くのを悲しがつて、見送りに來て一緒に舟に乘る親類の者と、夜どほし泣くに極つてゐた。それに、お前の樣子を見れば、どうも島へ往くのを苦にはしてゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのかい。」

喜助は、につこり笑つた。

「御深切に仰しやつて下さつて、有難うございます。なる程島へ往くといふことは、外の人には悲しいことでございませう。其の心持は、私にも思ひ遣つて見ることが出來ます。しかしそれは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地で

鬼の栖む處

はございますが、其の結構な土地で、これまで私の致して參つたやうな苦みは、どこへ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよし辛い處でも、鬼の棲む處ではございますまい。私はこれまで、どこといつて自分のゐて好い處と云ふものがございませんでした。今度お上で島にゐろと仰しやつて下さいます。そのゐろと仰しやる處に落著いてゐることが出來ますのが、先づ何よりも有難いことでございます。それに私は、こんなにか弱い體ではございますが、ついぞ病氣を致したことはございませんから、島へ往つてから、どんなつらい仕事をしたとて、體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。それから、今度島へお遣り下さるにつきまして、二百文の鳥目を戴きました。それをこゝに持つてをります。」

鳥目　テウモク。錢の異稱。

かう云ひかけて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ付けられるものには、鳥目二百文を遣すと云ふのは、當時の掟であつた。喜助は語を繼いだ。

工面のよい時

「お恥づかしいことを申上げなくてはなりませぬが、私は今日まで二百文と云ふお足を、かうして懷に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで仕事に取附きたいと思つて、仕事を尋ねて歩きまして、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりませなんだ。それも現金で物が買つて食べられる時は、私の工面のよい時で、大抵は借りたものを返して、又跡を借りたのでございます。それがお牢に入つてからは、仕事をせずに食べさせて戴きます。私はそればかりでも、お上に對して濟まぬことを致してゐるやうでなりませぬ。それにお牢を出る時に、此の二百文を戴いたのでございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見まずれ

ば、此の二百文は私が使はずに持つてゐることが出來ます。お足を自分の物にして持つてゐると云ふことは、私にとつては、これが始めでございます。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出來るか分りませんが、私は此の二百文を、島でする仕事の元手にしようと樂しんでをります。」

かう云つて、喜助は口を噤んだ。

庄兵衞は「うん、さうかい。」とは云つたが、聽く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何も云ふことが出來ずに考へ込んで默つてゐた。

庄兵衞はかれこれ初老に手の屆く年になつてゐて、まう子供が四人ある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮らしである。平生人には吝嗇と云はれるほどの儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために著るものゝ外、寢卷しか拵へぬ位にしてゐる。

意表に出る

初老
四十歳を云ふ。

しかし不幸なことには、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮らしを立てゝ行かうとする善意はあるが、裕かな家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が滿足するほど手元を引締めて暮らして行くことが出來ない。動もすれば、月末になつて勘定が足りなくなる。すると、女房が內證で里から金を持つて來て、帳尻を合はせる。それは夫が借財と云ふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。さう云ふことは、所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衞は、五節供だと云つては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だと云つては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮らしの穴を埋めて貰つたのに氣がついては、好い顏はされぬ。格別平和を破るやうなことのない羽田の家に、折々波風の起るのはこれが原因である。

庄兵衞は今、喜助の話を聽いて、喜助の身の上を我が身の上に引

扶持米
フチマイ。一人一日の食料を標準として、米を毎月給すること。江戸時代には一人一月分として、玄米一斗五升を與へたり。

五節供
古より行はれし五つの節句。卽ち正月七日・三月三日・五月五日・七月七日・九月九日の節句をいふ。

七五三の祝
男子は三歳と五歳、女子は三歳と七歳とに當る年の十一月十五日に行ふ祝儀にして新衣をつけ氏神に參詣す。

桁が違ふ

比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して無くしてしまふと云つた。いかにも哀れな、氣の毒な境界である。しかし一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれほどの差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮らしてゐるのに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はゞ算盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有難がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちに無いのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。其の心持は、こつちから察して遣ることが出來る。併し、いかに桁を違へて考へて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で仕事を見附けるのに苦しんだ。それを見附けさ

口を糊す
くちすぎをなす。

出納
スヰタフ。

意識の閾の上に頭を擡ぐ

へすれば、骨を惜しまずに働いて、やう〳〵口を糊することの出來るだけで滿足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生れてから知らぬ滿足を覺えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分は、扶持米で立てゝ行く暮らしは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るに、そこに滿足を覺えたことは殆どない。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。併し心の奥には、かうして暮らしてゐて、ふいとお役御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようと云ふ疑懼が潜んでゐて、折折妻が里方から金を取出して來て穴塡めをしたことなどが分ると、此の疑懼が意識の閾の上に頭を擡げて來るのである。

係累　妻子眷屬のわづらひ。

一體此の懸隔はどうして生じて來るだらう。たゞ上べだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだと云つてしまへばそれまでである。併しそれは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなれさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだと、庄兵衛は思つた。

庄兵衛はたゞ漠然と、人の一生といふやうなことを思つて見た。人は身に病があると、此の病がなかつたらと思ふ。其の日其の日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又其の蓄がもつと多かつたらと思ふ。此のやうに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて蹈止まることが出來るものやら分らない。それを今目の前で蹈止まつて見せてくれるのが此の喜助だと、庄

後光

兵衛は氣がついた。

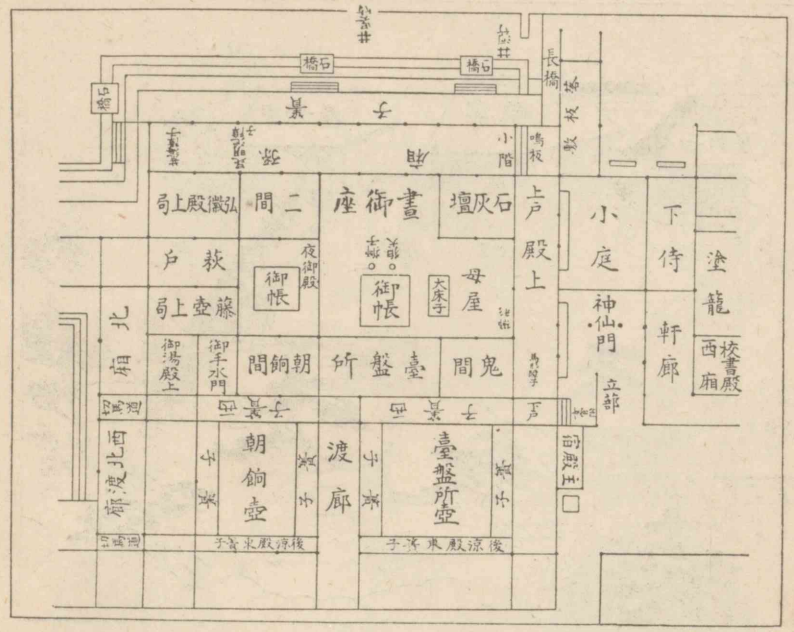
庄兵衛は今更のやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。此の時、庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から後光がさすやうに思つた。

（森林太郎―鷗外全集）

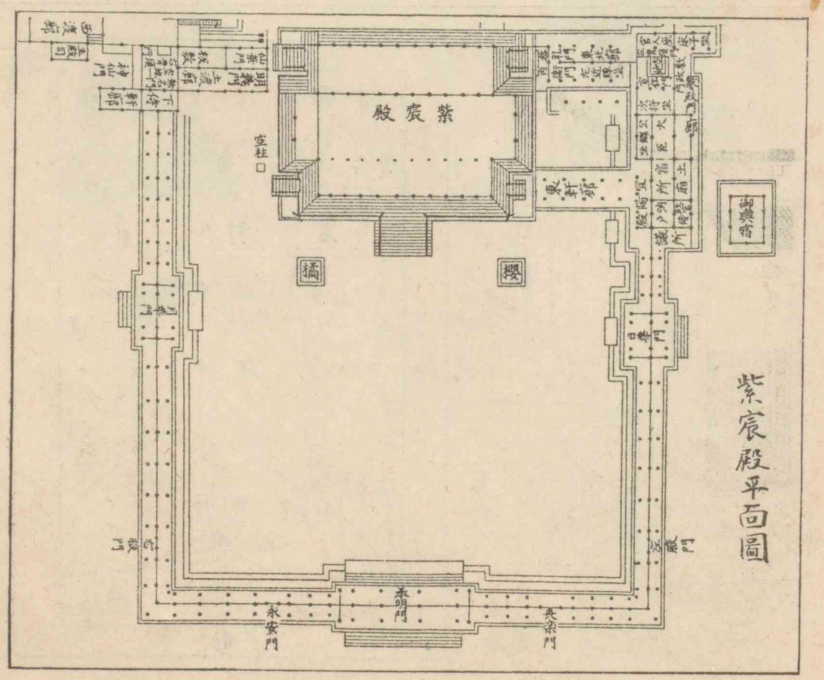
専修念佛の輩の、わが弟子、人の弟子といふ相論のさぶらふ事、もての外の子細なり。親鸞は弟子一人ももたず候。その故はわが計ひにて、人に念佛を申させ候はゞこそ弟子にても候はめ。人々彌陀の御催ほしに預かつて、念佛申し候ふ人を、わが弟子と申すこと、極めたる荒涼の事なり。つくべき縁あれば伴なひ、離るべき縁あれば離るゝ事あることも、師をそむきて人につれて念佛すれば往生すべからざるものなりなんどいふこと不可說なり。如來よりたまはりたる信心を、わが物がほにとりかへさんと申すにや。返す〳〵もあるべからざる事なり。自然のことわりにあひかなはゞ、佛恩をも知り、また師の恩をも知るべきなり。

（親　鸞）

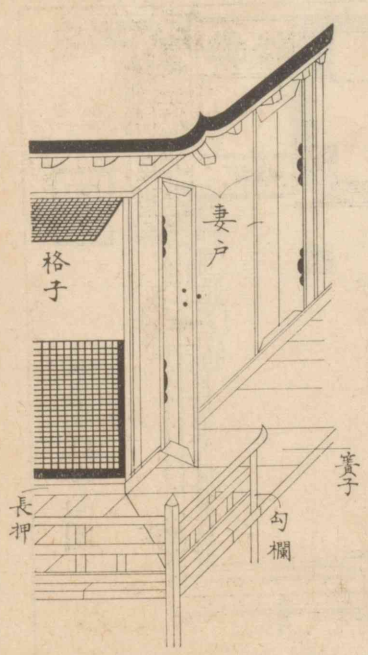
清涼殿平面圖

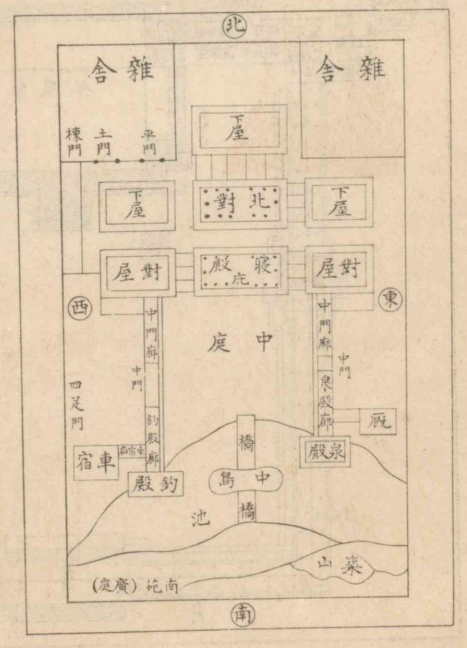


紫宸殿平面圖

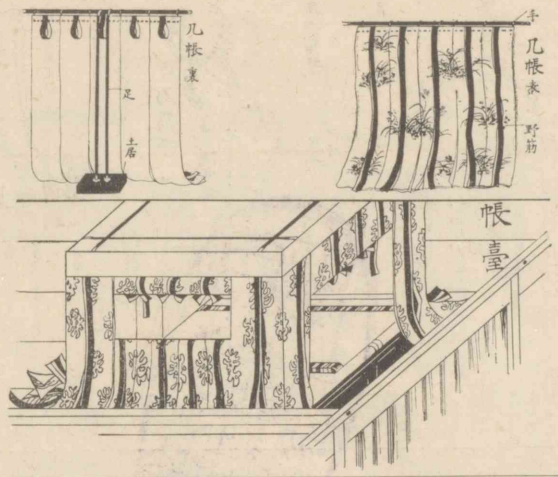


下屋
寢殿
東對屋
西對屋
廊
中門
廊
中門
泉殿
釣殿
池
中島
重宿
築山

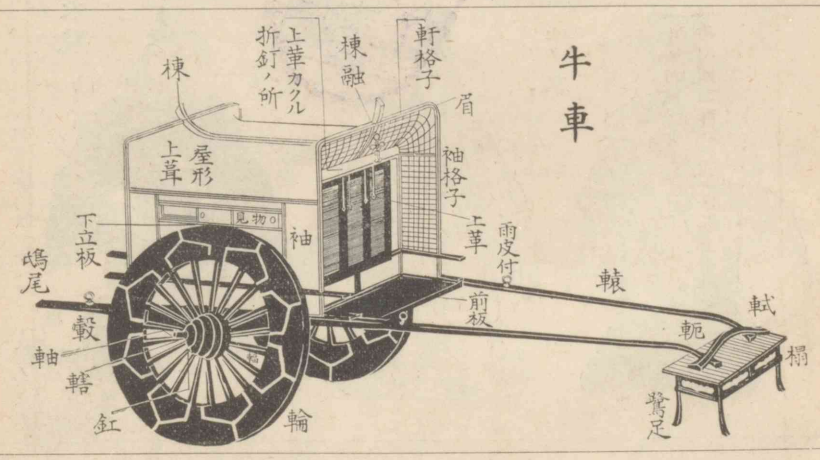

格子
妻戶
簀子
長押
勾欄

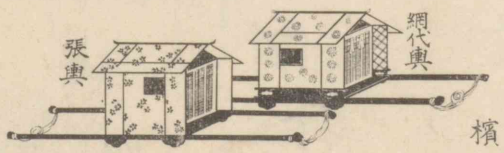

北
雜舍
雜舍
棟門
土門
平門
屋
下屋
北對
下屋
對屋
寢殿
對屋
西
東
中門廊
中門
中庭
中門廊
中門
泉殿廊
四足門
釣殿廊
廐
宿車
釣殿
橋
中島
橋
泉殿
池
築山
南
南北（廣庭）

風折烏帽子
立烏帽子
侍烏帽子
長小結
指貫
菊綴
水干
後紐
前紐
頂頭掛
狩衣
指貫
水干裏
衣冠
直衣
狩衣
檜扇
櫛
奴袴
直垂著用圖
大紋
肩衣
菊綴
直垂
紐



牛車





檳榔車

網代車

昭和八年八月一日印刷
昭和八年八月五日發行
昭和八年十二月十八日訂正再版印刷
昭和八年十二月廿一日訂正再版發行

著作權所有
大日本帝國教育會

最新國文讀本（全十冊）

定價各金六拾錢

編者　佐佐木信綱
編者　武田祐吉
發行者　東京市神田區錦町三丁目十一番地　湯川松次郎
印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　井下精一郎

發行所　東京市神田區錦町三丁目十一番地
大阪市南區順慶町一丁目五十三番地
湯川弘文社